

十五世紀のジェントリの手紙は、あいさつ部分が なぜ長いのか？

新井由紀夫

はじめに

十五世紀に英語で書かれた手紙は、しばしば形式的でたいくん長いあいさつの導入部分を持っていた。『パストン家書簡集』を編集したノーマン・デイヴィスによれば、あいさつ部分は、定式句と呼ばれることく、細部に違いは見られるものの一定のパターンに従って構成されていた⁽¹⁾。彼はエリザベス・ポインティングズから母アグネス・パストンへ宛てた一四五九年の手紙を例にとり、あいさつ部分を七つに区分した。以下にそれを引用してみよう⁽²⁾。

[1] Right worshipfull and my most entierly beloude moder,

[2a] in the most louly maner

[2] I recomment me vnto youre gode moderhode,

[2b] besekeyng you dayly and nyghtly of your moderly blissing,

[3] ever-more desiryng to here of your welfare and prosperite,

[4] the which I pray God to contynw and encresce to youre hertes desyre;

[5] and yf it lyked youre gode moderhode to here of me and how I do,

[6] at the makynge of thys lettre I was in gode hele of body,

[7] t[h]anked be Jesu.

[1] 尊敬する最愛のお母様へ

[2a] 衷心より

[2] よろしくごあいさつ申し上げます⁽³⁾

[2b] お母様には日々のお祈りをお願いいたします

[3] お母様のご健勝であられるという知らせをいつも願っております

[4] 意になつて、お母様のご多幸が弥増すよう神様にお祈りいたします

[5] 私の消息をおたずねなら

[6] 心身共に健康で、この手紙をしたためております

[7] 神様のおかげです。⁽⁴⁾

またデヴィスは、手紙の差出人と受取人との身分や関係に応じて、手紙のあいさつ部分にいくつかのパターンがあったことを指摘している。例えば、友人や知人へは、*Right worshipful sir, I recommend me to you* という書き出しで始まるのが普通であり、兄弟同士でも、細かな差異はあつても、この表現が用いられたという。一方、子供から父母へは、*Right reverend and worshipful father, I recommend me unto you, beseeching you lowly of your blessing..* のような、より丁重で尊敬をこめた表現が用いられるのが普通であつたという。⁽⁵⁾

本稿の目的

筆者は、一九九六―七年にイギリス留学した際、英語で書かれた手紙のマニエスクリプトを転写して、チェックしてもらった勉強をした。手紙の多くは、羊皮紙や紙に、隙間無く細かい字が書き連ねられているもので、余白部分は切り取られて別の手紙に再利用されていた。節約の結果として、短冊を横にした、切れ端のような手紙が多い。しかしそのような手紙であっても、長いあいさつ部分が、連綿と続いていることがしばしばだった。一語一句、それらを書き写してゆく単調な作業を繰り返すなかで、必然的に浮かんできた疑問が、本稿の出発点となっている。羊皮紙や紙が貴重だったこの時代に、長い書き出し部分はなぜ書かれたのだろう。それが必要とされる、何か正当な理由があったのではないか。

デイヴィスの指摘から容易に想像されるように、手紙の差出人と受取人との間の、社会的身分や階層序列を表すのに、あいさつ部分がおあつらえ向きであることは確かである。さらに身分・階層序列に見合ったあいさつ書式を紹介したマニュアル (formularies) が存在し、手紙の差出人はそれらを手本としていたといわれる。⁽⁶⁾ 従って英語で書かれた手紙のあいさつ部分を見れば、当時の社会の厳格な身分・階層秩序がわかるという主張もある。⁽⁷⁾ しかし果たしてそうした説明でことう足りするのだろうか。手紙の差出人は、マニエアルにひたすら忠実に従っていただけなのだろうか。長いあいさつ部分は、身分・階層序列を正確に表象すること以外にこめられた意味はないのか。これらの疑問について、ジェントリの手紙のあいさつ部分を、手紙の内容と関連させて分析してみることと考えてみたい。

十五世紀のジェントリの手紙史料に関するカーペンタの議論

十五世紀に英語で書かれた手紙のまとまった史料としては『パストン家書簡集』、『スタナー家書簡集』、『プランプトン家書簡集』、『シーリィ(セリー)家書簡集』、それに『アーンバラ家書簡集』の五つがある⁽⁸⁾。これらジェントリを中心とする手紙史料は、これまで政治史や社会史研究における議論の論拠として一部が引用されたり、あるいは単に、歴史叙述にアクセントを与えるエピソードを提供するものとして、興味本位に取り上げられることが多かった。いわば手紙に書かれている内容だけが重視され、書かれていることがそのまま事実を示すものとして無批判に扱われてきた。このような風潮を初めて批判したのが、カーペンタである。『スタナー家書簡集』の新版、および最近再発見された『アーンバラ家書簡集』を編集した彼女は、歴史史料としてジェントリの手紙を用いる前に、必要な手続きを踏むべきであると警鐘をならした。手紙からは何がわかるのか、あるいは何がわからないのか、効用と限界とをきちんと認識した上で用いるべきであることを述べ、歴史学が手紙という史料を扱う前提として必要となる、いわば書簡史料類型論の必要を示唆した⁽⁹⁾。

その上で彼女は一步踏み込んで、手紙で用いられている言葉に着目した歴史学的分析を行っている。カーペンタによれば、手紙の用語を見ると、家系を構成する成員は、お互いの間柄特に序列に関しては、表現にかなり気を遣っていることがわかるという。義理の関係にあっても、'brother'や'sister'と呼び合うことが普通だったことから、家系の成員の範囲がかなり広いものだったことがわかるが、その成員間の関係は通婚によってかなり複雑で錯綜したものとなること(が)しばしばだった。そこで、'cousin'という呼び方が、重宝されたという。遠縁にあたる人物からの手紙のあいさつ部分を、カーペンタはその例として挙げている。

尊敬し、信頼する縁者 (cousin) へ、よろしくごあいさつ申し上げます。当方、未だ尊顔を拝する機会を得ないジェントルマンですが、時が来ればもっとお近づきになれるものと確信しております。⁽¹⁰⁾

この手紙の差出人は、自己紹介とともに、受取人と縁続きであるという関係を相手にさりげなく伝えることに意味があると考え、さらに手紙のあいさつ部分は、相手との関係を明らかにする場としてふさわしいとも考えていたことがここからわかる。

さらにカーペントは、手紙のあいさつ部分やそのなかの言葉は、当時の社会の身分・階層序列 (gradations) に、厳密に対応して用いられていることを主張した。『スタナー家書簡集』をみると、地域の有力ジェントリであったスタナー家に奉仕する者のなかで、社会的地位の低い者はかなり卑下した言葉を、スタナー家の者に対して用いていることが明らかだという。また、自らも土地保有者階層に属する中小ジェントリは、尊敬をこめてではあるが実務的な言葉を、さらにスタナー家にゆかりのある者は、そのことを手紙のあいさつ部分で平気で述べるし、かなり事務的で素っ気ない言葉を、それぞれ用いるという違いが見られるという。このように、ジェントリのなかでも序列が存在していたことが手紙から明らかであるが、用語法における最も大きな違いは、ジェントリとノビリティ (貴族) との間に見られ、それは社会における身分的序列における格差の実態を反映しているという。⁽¹¹⁾『アーンバラ家書簡集』のイントロダクションで、カーペントは次のように主張する。

地域における社会的地位や名誉といったものが、ジェントリの階層序列に密接に関連していたことはよく知られている事実だが、手紙の用語法が、その階層序列を探る手がかりを与えてくれることは、これまであまりよく理解されてこなかった。

そして、『アーンバラ家書簡集』のなかでは、大貴族向けにはお世辞たらたらのあいさつの言葉で、騎士やジェントリ階層向けには 'worshipful sir' が、中小ジェントリやヨーマンに対しては 'wellbeloved friend' が、きちんと区別されて用い

られているという。また、ジェントリ上層向けには、‘worshipful and reverent sir’を、それ以下のジェントリ向けには‘worshipful sir’をそれぞれ用いるという区別が見られたようだという。⁽¹²⁾

十五世紀の英語の手紙には手本があつたのか

カーペンタが言うように、英語の手紙には、社会の階層序列に厳密に対応する用語法のルールが実際に存在していたとするならば、そのルールを手紙の書き手は、いったいどこから学んだのだろうか。そもそも、手紙はいったい誰が書いたのだろうか。

パストン家の場合、女性にはほぼすべてが書記を用い、男性でもその多くは書記を用い、適当な書記が手近にいなかったり危急の場合は自筆であつたことが明らかとなっている。書記は、パストン家に所領管理などの仕事で奉仕する小ジェントリ（準騎士あるいはジェントルマンと呼ばれている）や、パストン家の礼拝堂付き聖職者、法実務家などであり、また少なくとも一人は、チャンセリ（国王尚書部）の役人であつた。⁽¹³⁾ このように、十五世紀、英語で書かれた手紙であっても、筆記者を介して書かれることが多かったといえる。手紙の文面を逐語的に口述筆記させるにせよ、書記の知識にまかせるにせよ、何らかの手本の存在が不可欠であつたように思われる。しかし、十五世紀に英語で書かれた手紙の書き方マニュアルは現存していない。おそらくは、書かれなかったのだろうと考えられている。⁽¹⁴⁾ だとすれば、いったいどんな方法で、手紙の書き手はルールを学んだのだろうか。結論を先に言うならば、それには複数のチャンネルがあつたのだろうと思われる。

『パストン家書簡集』を編集したデイヴィスは、十四世紀、イギリスで書かれたフランス語の手紙の書き方の影響を強調する。その論拠として、デイヴィスは、冒頭で掲げた手紙の定式句における七区分が、ラテン語のそれよりも、十四世紀に書かれたフランス語の手紙や、手紙の書き方に酷似していることを挙げている。⁽¹⁵⁾

British Library, Harley MS 4971 のなかには、十四世紀、エドワード三世期に書かれた、手紙の書き方マニュアルがあり、身分や階層序列に従ってフランス語の手紙をどう書いたらよいかを、実例でもって示しているという。例示の第一部は、エドワード三世からランカスタ公ヘンリ宛ての書式で始まり、次に王太子からノーサンプトン伯宛ての書式、続いて伯からバロンへ、バロンから騎士へ、騎士から準騎士へ、準騎士から同輩へ、商人から商人へ、父から子へ、市民から市民へ、領主からその所領役人へ、友人から友人へ……という順番で、実際の手紙の例が挙げられている。例示の第二部は、聖職者に関してであり、まず、大司教からバロンへ、司教から騎士あるいは大修道院長へ、大修道院長から準騎士へ、小修道院長から商人へ、修道士から同輩へ、父から子（学生）の師匠へ、と続く。例示されている手紙はすべてフランス語で書かれ、またすべての手紙はそれに対する答礼の手紙とセットになっているという。¹⁶ このように当時の身分・階層序列に従って、それぞれにふさわしい手紙の書式を紹介している、いわば『書簡文範』（Complete Letter-Writers）のマニュアルがいくつか現存しており、それらが英語の手紙を書く際の手本になったことがまず想定できる。

しかしながら、中世レトリック研究をみるならば、手紙の書き方マニュアルとしては、ラテン語で書かれたものが圧倒的に多く、その影響を無視することは出来ないと考えられる。中世レトリックに関する膨大な研究成果をたどることは筆者の手に余る。ここでは、そのなかでもイギリスやアメリカのチャンセリ・イングリッシュ研究者の考え方を指摘するにとどめたい。彼らは、十四世紀後半、オックスフォード大学のトマス・サンプソンら書簡作成教師によって書かれたラテン語あるいはフランス語の書簡作成の技芸（Ars Dictaminis）と呼ばれる書物やフォーミュラリが、イギリスにおけるチャンセリ（国王尚書部）に与えた影響をとりわけ重視する。それを、本稿に引きつけて言い換えるならば以下のようなだろう。すなわち、十五世紀になって中央の国王尚書部の役人たちは、国王の行政命令などを伝える手紙の一部を英語で書くようになった。その際彼らは、普段から親しんでいた、十四世紀にイギリスで書かれたラテン語やフランス語の書簡作成の技芸すなわち手紙の書き方マニュアルを応用してフォーミュラとした。彼らは英語のフォーミュラを書き残さ

なかったけれども、彼らが書いた国王からの手紙は、その受取人である地域の貴族やジェントリにとってあるいはその書記たちにとって、フォーミュラを学ぶよい手本となった。さらに地域の貴族やジェントリとその書記たちは、中央の役人を書記に雇ったりあるいは中央の政府や裁判所との手紙によるやり取りを通じて、英語の手紙の書き方のルールを身につけていった。このようにして地域政治社会のエリート層に定着した手紙のフォーミュラを、こんどは彼らエリート層自身が、地域社会のより下層に対して用いることで、さらに地域社会へとそれは浸透していったのであると。⁽¹⁷⁾

結局のところ、デイヴィスと、チャンセリ・イングリッシュ研究者との違いは、デイヴィスがチャンネルの一つとして文学や口語の影響も認めていること、その結果として十四世紀末から英語の手紙の定式句が既にあつたとデイヴィスはみなしていること、この二点であるように思われる。複数チャンネルの存在という点に関連しては、興味深い事実がある。十五世紀の英語詩には、手紙のあいさつ部分と同じ表現で始まる節を持つ詩が存在し、しかも階層序列によるその違いを示すかのようにその表現の異なる詩が見られる。これらの詩は、読まれただけでなく歌って聞かせたものでもある。⁽¹⁸⁾ だとすれば、口承というチャンネルを通じて、手紙の書き方が伝えられていた可能性を、これら詩の史料は示していると考えられる。さらに中世教育史研究によれば、中世のグラマー・スクールにおける、ラテン語による手紙の書き方教育の影響も指摘されている。⁽¹⁹⁾ このようにいくつかのチャンネルを通じて、英語の手紙のフォーミュラは、手紙を書く必要がありかつ書けるものたちの間では、少なくとも十五世紀のかなり早いうちから定着していたものと考えられる。

手紙のあいさつ部分は、身分・階層序列を厳密に反映しているだけなのか

先に紹介したカーペンタの研究が、手紙のなかで用語がどのように実際には用いられていたのか、歴史学者としてそれが社会の仕組みとどう関連しているのかに注目しようと試みているのに対して、アメリカの研究者を中心とするチャンセ

リ・イングリッシュの研究は、どのようなプロセスで、用語法を含め英語の手紙の定式句が確立してゆくのか、という点に関心が集まっている。中世後期の「標準的な」英語が、手紙の書き言葉による影響を受けてどのように形作られていったのかという問題関心が、後者の研究の根本にあるからであろう。その問題関心から言えば、結論が先にあって、それと都合のよい議論だけをとりあげているように思える。しかしカーペンタも、手紙のあいさつ部分にみられる定式句が、当時の社会の身分・階層序列 (gradations) に厳密に対応して用いられていることを強調するだけでは、いわば当たり前すぎてもの足りない。さらに言えば、カーペンタもデイヴィスもチャンセリ・イングリッシュの研究も、定式句や用語法のフォーミュラリといった、ルールの側にばかり目が向けられている点で、片手落ちであると言わざるを得ない。ここまでの議論で、フォーミュラが存在し、それが英語の手紙を書く者の間ではよく知られていたことは確認できた。しかし、たとえルールが広く理解されていたとしても、そのルールが現実の歴史的社会的なかで厳密に運用されていたかどうかは、また別の問題である。

百五十年ほど前、王侯貴族を中心とする膨大な書簡集を編んだヘンリ・エリスは、その第三集の前書きで、ある十三世紀のマニスクリプトを紹介した。それはラテン語の手紙の書き方のルールを述べたものである。筆者が本稿の主題との関連で特に着目したいのは、むしろそのルールのあとに書かれている例外についての記述部分である。

上位の者が差出人の場合、自分の名前を主格 (nominative case) で、必ず冒頭に書くこと。(手紙の冒頭は、「私が、誰々にあいさつする…」という書式になる)。上位者が受取人の場合、上位者の名を与格 (dative) で、必ず冒頭に書くこと。(手紙の冒頭は、「誰々に、私があいさついたします…」という書式になる)。もしも同輩や同じ身分である場合は、どちらが先でもよい。ただし相手の好意ある扱いを期待する手紙の場合には、(たとえ相手(受取人)が目下の者であっても、) 受取人の名を冒頭に与格 (dative) の複数形で「誰々に、私が…」書くこと。²⁰

差出人であるか受取人であるかに関係なく、上位者の名を、必ず手紙の冒頭に書くことが原則であることを述べたくだ

りである。ここからまず言えることは、身分・階層序列が絶対であることを述べたこの原則にも、例外として、自由な選択の余地が存在したということである。そのような場合、手紙の差出人と受取人との社会的関係や、手紙の内容によって、あいさつの書き方が変わることが予想される。つまり、身分・階層序列に従ったあいさつ部分の書き方ルールから逸脱することがありうることを、この史料は意味している点でたいへん興味深いと考えられる。

手紙の書き手があいさつ部分を書く際、身分・階層序列のルールに、必ずしも盲従していたわけではなかったことをこの史料は暗示している。従って、我々は、十五世紀に書かれた英語の手紙史料に立ち戻って、この問題を実際に検証してみ必要がある。その際、手紙のあいさつ部分を、差出人の社会的地位や受取人との社会的関係、さらには手紙の内容に留意して分析してみたい。

(二)

対象とする史料

ヨークシャ、ウエスト・ライディング地方のジェントリ家系に、ネアズバラ (Knaresborough) 近郊のプランプトン (Plumpton、現 Plompton) を本領とする家があった。十三世紀後半以降、この家系の代々の当主は騎士に叙せられ、ラシカスタ公領の地方役職に就いてきた。一四七九年の財産評価によれば家系の保有する主要な所領からの年間実収入額だけで、二九〇ポンド一四シリング三と二分の一ペンスにのぼり、この地方の騎士家系二〇五家の年収が当時四〇〇〜六〇ポンド、平均一一〇ポンドであったことを考えても、この家系が地域の支配的なジェントリ七家系のうちのひとつであったことが十分理解される。⁽²²⁾

今回の分析には、この家系の十五世紀後半の当主であった、サー・ロバート・プランプトン (Sir Robert Plumpton)

(二四五三年生まれ、一五二三年没)の手紙、全一七一通(一四八〇—一五二一または二三年)を用いる。ただし、父親の死により家督を継いだ二〇代後半から、六〇代末までに、サー・ロバートが受け取った手紙が中心である。前掲註(8)で述べたように、この史料の刊本である『プランプトン家書簡集』には、十九世紀の版と、最近のカービー版があり、新しいものには最近の研究成果が盛り込まれているが、誤植が多いため、参照可能な限りオリジナル史料をここでは用いる。⁽²³⁾ プランプトン家については、カービーの研究やドックリーの紹介などがあるが、手紙の書式について分析したものはない。⁽²⁴⁾ この史料を選んだ理由は単純である。前述したように十五世紀のジェントリの書簡集は五つ現存するが、プランプトン家の手紙は内容が地味であるせいで、そのなかでもっとも着目されてこなかった史料だからである。またこれまでの研究は、手紙の内容にばかり目がいつていたが、その書式についてはほとんど議論されてこなかった。書式についてふれられることがあっても、書式の典型や特徴が述べられるだけに止まっていた。そこでここでは書式の典型を追うよりも、むしろ細かな差異や例外の存在、また書式からの逸脱と見える部分に着目して考察してみたい。ただし以下の議論は、一七一通にもとづく分析であり、十五世紀に英語で書かれた手紙が数千通現存している事実からすれば氷山の一角をつついたにすぎず、あくまでもケーススタディであることをお断りしておきたい。

王侯貴族はどのようなあいさつをするのか

まず、カーペンタが『アーンバラ家書簡集』を用いて指摘した議論を検証することから始めよう。‘worshipful sir’⁽²⁵⁾と‘wellbeloved friend’の厳密な区別に関して調べてみた。この部分は、冒頭で紹介した手紙のあいさつ部分に関するデヴィスの七区分では、一番目、すなわち相手への呼びかけや、相手に対する敬称にあたる部分である。サー・ロバート・プランプトンの手紙一七一通のうち、約一五%、二五通の手紙が、‘wellbeloved’⁽²⁶⁾(親愛なる)をこの部分で用いていた。‘wellbeloved’を用いていたのは、サー・ロバート自身が妻に宛てた手紙一通を除き、すべて王侯貴族や聖界貴族であり、

‘wellbeloved’の用法に関する限り、カーペンタの指摘はプランプトンの史料からも例外なく裏付けられた。⁽²⁷⁾

しかしながら、それに対応する表現である、‘worshipful’（尊敬する）の用法に関しては、少なくとも二通の例外がみられた。一通は聖ヨハネ騎士修道会イギリス管区長からサー・ロバート宛てのもの、もう一通は、サリ伯トマス・ハワードからサー・ロバート宛ての手紙である。⁽²⁸⁾ これら二通の手紙では、前述の手紙の書き方ルールに従えば、より目上の者に対して用いられるはずの用語 ‘worshipful sir’ が、大貴族から騎士宛の手紙のあいさつ部分で用いられている。『アーンバラ家書簡集』は、一四二〇年代から五〇年に書かれた手紙であり、プランプトンのものは、一四八〇年頃から一五二〇年に書かれたものであるという違いはあるにせよ、ルールからの逸脱と見えるような例外の存在について、もう少し詳しく検討してみた方がよさそうである。そこで以下では、まず最初にデイヴィスの七区分のうちの二番目の部分に関して検討し、次いであいさつ部分全体のパターンに関して検討を加えたあとで、^(三) でそれらの変化や例外について考察してみたい。

‘I recommend me to you’（よろしくあいさつ申し上げます）か ‘I greet you well’（いじげんよう）とあいさつを述べる）か

デイヴィスの区分による、二番目すなわち手紙の差出人から、相手へのあいさつ定型句に関しては、プランプトン家が受け取った手紙から何がわかるだろうか。ちなみにこの部分に関してはカーペンタは何も言及していない。⁽²⁹⁾ ‘greet’ は、‘greeting’ すなわち、十二世紀以降の国王証書や令状によく用いられたラテン語の ‘salutem’ からきていると思われる。従って王侯貴族からの手紙、特に公務や職務に関する手紙に多いことが予想される。そこでまず公文書的性格の強い手紙、すなわちプランプトン家が受け取った召喚状（the letters of summons）⁽³⁰⁾ から分析を始めるとしよう。

軍事目的のいわゆる召集令状は一〇通現存する。⁽³⁰⁾ 第四代ノーサンバランド伯ヘンリ・パーシィ（一四八九年没）は、サ

ー・ロバート宛てに七通召集令状を出しているが、そのほとんどは同じ書式である。⁽³¹⁾しかし一通だけ、‘Right welbeloued frinde, I greet you well...’と、他に見られない‘friend’の呼びかけを持つあいさつ部分で始まり、末尾の結びの句に、‘cousin’を持つ、親しみをこめた召集令状がみられる。⁽³²⁾内容も具体的であり、スコットランド軍に対抗するために、きちんと装備の整った徴募兵を連れて参上するよう命じている。サー・ロバートの一団をすぐに必要としたという火急な理由がそこにはあったからだと思われる。

このような召集令状に限らず、王侯貴族からプランプトン家宛ての手紙のほとんどは、‘I (We) greet you well’というあいさつ部分を持っていた。ヘンリ六世、ヘンリ七世、グロスタ公リチャード（後のリチャード三世）、ウォリク伯リチャード・ネヴィル（Richard Neville, earl of Warwick）（一四七一年没）、モンタギュー侯ジョン・ネヴィル（John Neville, Lord Montague）（一時ノーサンバランド伯も兼ねる、一四七一年没）、マサムのスクロウプ卿（John le Scrope, Lord Scrope of Masham）（財務府長官、一四五五年没）などは皆、プランプトンに‘greet’している。一方、ヨーク市長や小修道院長、それにジェントリ以下の者たちは、プランプトンに‘recommend’している。しかしながら、貴族でありながら、身分・階層序列から言えば、はつきり格下であるジェントリに、‘recommend’している手紙も見られる。このような、序列ルールからの逸脱・例外について三人の貴族の手紙を取り上げてより詳しく見てみることにしよう。

なぜ貴族はジェントリに‘recommend’する場合があるのか

一人目は、先に‘worshipful’（尊敬する）の用法に関する議論で取り上げた、サリ伯トマス・ハワード（Thomas Howard, earl of Surrey）（一四四三―一五二四年）である。一四九二年八月六日付けサー・ロバート宛てのサリ伯の手紙は、‘Right worshipfull cousin, right hartelie I comend me unto you...’で始まり、‘Your loving cozen, Thomas Surrey’で終わる。この当時サリ伯は、ヘンリ七世の太子アーサーの名代で、東部および西部辺境守護職代理（under-warden of

the East and West Marches) として活躍する大貴族であった。この手紙の内容は、戦場で見失った自分の馬をサー・ロバート・プランプトンの関係者が持っているので、返還してくれるようサー・ロバート・プランプトンに依頼するものであった。⁽³³⁾ サリ伯は、プランプトンと縁続きであることを思いだし、それを意図的に手紙で利用したと言える。

二人目は、シュロウズベリ伯ジョージ・トールボット（一四六八—一五三八年）である。曾祖父のようにフランスで戦った若い軍人貴族が、一四九二年七月八日にサー・ロバートに宛てた手紙は、*'Right welbeloued frend, I recommend me vnto you..'* で始まり、*'Your frend, G. Shrewsbury'* で終わるが、その内容は、知人の寡婦産の権利を妨害しないよう要求するというアンフレンドリイな脅しであった。⁽³⁴⁾

最後は、召集令状のところで述べた、第四代ノーサンランド伯ヘンリ・パーシイによる手紙である。彼は、一四六一年タウトンの戦いで戦死した第三代伯の、ただ一人の息子である。エドワード四世によって伯に復位されてのち、父祖からのパーシイ家の勢力基盤を急速に回復し、ヨーク公リチャード（のちのリチャード三世）と並んで、ウェスト・ライディング地方の有力大貴族となった。一四七〇年にパーシイ家が代々占めてきた、東部および中部辺境守護職（warden of the East and Middle Marches）に任じられ、翌年、ランカスタ公領ネアズバラ執事職および城代（the stewardship and constable of Knarborough）に任じられた。⁽³⁵⁾ プランプトン家当主は代々のパーシイ家当主に仕えてきた。第四代伯はサー・ロバートの主君であると同時に、サー・ロバートの妻アグネスの義理の兄でもあるという関係にあった。

この第四代伯は、サー・ロバート宛てに一四通の手紙を書きのこしているが、そのうちの五通は、*'greet you'* タイプであり、八通は、*'recommend you'* タイプである。なお一通は、あいさつ部分を欠いている。*'greet you'* タイプ五通は、前述した召集令状や、伯のランカスタ公領ネアズバラ執事職に関連する公文書的性格の手紙である。⁽³⁶⁾ 一方 *'recommend you'* タイプ八通のうち四通には、第四代伯からの個人的な依頼や、アフィニティ（私党）の領袖としての伯による要請などが含まれていた。ネアズバラの森から獵期の鹿をヨーク市長に贈ることをサー・ロバートに依頼し、その労をねぎら

ったり (LB, no.38 (p.27) [1488/6/28])、仲裁裁定に従わなかった係争当事者らを、ヨークにいる自分のもとへ出頭させることをサー・ロバートに依頼 (LB, no.51 (p.31) [1482?/2/14]) している。また、アフィニティの領袖として、庇護下にある者同士の争いを仲裁する意志を述べ、一方の当事者であるサー・ロバートとその相手に対し、自分がヨークシャに入るまで、互いに平穏を保つよう要請する (LB, no.57 (p.34) [1487/11/19]) かと思えば、親戚の相続問題に力添えするよう依頼したり (LB, no.39 (p.27) [1489?/4/1])、どちらかというところ私的な依頼の場合が多いように見受けられる⁽³⁷⁾。このように、第四代伯の手紙からは、内容に合わせてあいさつ部分を意図的に区別して書いていたのではないかという予測が成り立つように思える。第四代伯の息子である第五代伯ヘンリ・パーシイが、サー・ロバートに宛てて書いた手紙は六通現存するが、それらはいずれも 'recommend you' タイプであり、内容は私的な依頼に関することが多い⁽³⁸⁾。

同輩あるいは目下の者はどういうあいさつをするのか

これまで貴族からの手紙を中心に見てきたが、ここからはサー・ロバートと同輩あるいは目下の者からの手紙を検討してみよう。その際、デイヴィスの区分に従って一つ一つ見てゆくのではなく、あいさつ部分全体のパターンに注目してみよう。

サー・ロバート宛の手紙が三通以上現存している人物は、前述した第四および五代伯を除き十二名、そのうち五通以上現存している人物は、五名である。これら五名のうちサー・ロバートの妻、娘婿、甥、従弟といった近親者四名には、その人物固有のあいさつパターンが確認できる。以下順番に見てゆこう。

従弟エドワードのパターン

サー・ロバートの従弟であるエドワード・プランプトン (Edward Plumpton) (一五〇一年頃没) は、サー・ロバート

に法実務家として奉仕し、レター・ブックには彼の手紙二三通が現存する。⁽³⁹⁾ 彼の手紙に関して最も興味深い点は、一四九〇年を境としてあいさつパターンが変化していることである。一四八三年から一四九〇年一月までの六通のうち五通までは、*'After the most humble and due recommendation hade, please yt your mastership that in the most humble lowly wyse I may be recommended vnto my singuler good ladies'* (LB, no.197 (p.135) [1490/1/3]) という形である。⁽⁴⁰⁾ ところが一四九〇年二月以降の手紙一六通は、すべて以下のようなあいさつパターンとなっている。⁽⁴¹⁾ *'In my most humble wyse I recomend me vnto your good mastership and to my especyall good ladys'* (LB, no.186 (p.122) [1490/9/23]) の変化は手紙の内容に依拠しているわけではない。彼自身の結婚問題を扱っている三通 (nos 194,201,190) を除けば、内容の傾向には変化が見られない。彼の手紙全般にわたって話題となっているのは、法的助言や、彼が常駐していたロンドンにおける噂や情報などであった。さらには訴訟に関連して態度のはっきりしない人物に直接会い、サー・ロバートの敵か味方かを見極めたり、敵側の動向・情勢をつかんで報告している。彼の助言は、あとの手紙になるほど老練で適切なものとなっている。一四九六年の手紙で彼はこう述べる。

猊下 (ダラム司教リチャード・フォックス、玉璽尚書) が (ヨークシャ) 州内に入られるところを (州境で) お出迎えなされ、ヨークシャにようこそと歓迎の意を呈されて、一、二マイルほど騎乗同行なさるならば、ロバート様にとっていろいろと良きことがあるかと愚考いたします。⁽⁴²⁾

彼のあいさつパターンがなぜ変化したのかは不明だが、⁽⁴³⁾ しかしここで大事なことは、エドワード・プランプトンの手紙におけるあいさつ部分には、パターンが二種類あって、とても丁寧なものからそれほど丁寧でないものに、ある時期から一貫して変化したということである。

娘婿ジャーマンのパターン

ジャーマン・ド・ラ・ポウル (German de la Pole) (一五五一／二年没) の手紙は、一四九九年頃から一五〇四年にかけて六通、一五一五年に二通、合わせて八通現存する。一五〇四年に彼は成年に達し、サー・ロバートの娘アンと結婚、ダービーシャにサー・ロバートが保有する所領の執事として奉仕した。⁽⁴⁴⁾ 彼は手紙のなかで、自分の相続に関して好意ある取り計らいをサー・ロバートに期待し、後見人である祖母の頑迷さに不平を述べ、妹の結婚相手を探す相談をし、プランプトン家の安寧を願い、執事としての報告をなしている。彼の典型的で最も謙遜の意を表しているパターンは、以下の通りである。'Right honorable & worshipfull father & mother, in the most lowliest wyse that I can, I mekely recommend me vnto yow, desiring to here of your welfare & prosperite, the which I pray almyghty Jhesu long to continew, to His pleasure & to your most loy & comfort and harts ease...' ⁽⁴⁵⁾ この一四九九年頃書かれた手紙は、以下に(義理の)兄弟に対する同じようなあいさつが続き、サー・ロバートによる日々の祈りを希望することが述べられ・・・というように、あいさつ部分が全体(三三行)の半分以上(二一行)を占めている。というのも、

お便りいたしました理由は、他でもないあなた様のご健勝であられることを伺いたいからです。(なぜならば、一四九九年にはプランプトンで疫病が流行していたからであり、それゆえ) この手紙を誰の手助けをも借りずに、自分の手で急ぎしたためました。⁽⁴⁶⁾

時がたつにつれて、彼の手紙におけるあいさつ部分は、尊敬表現がやや減ってゆく傾向が見受けられるものの、ほとんどの手紙でパターンの基調は変わっていない。

妻アグネスのパターン

妻アグネス (Agnes Plumpton) の手紙は、一五〇二―四年に夫サー・ロバート宛て六通、一五〇三―四年に親族宛て

二通が現存する⁽⁴⁷⁾。親族宛の手紙がシンプルなあいさつ表現であるのに対して夫宛六通は、以下に示す一五〇四年の手紙に見られるように、たいへんへりくだった表現が用いられている。

[1] Ryght worshipfull Sir, [2a] in my most hartie wyse [2] I recomend me vnto yow, [3] evermore desiring to here of your pr^o [s] perytie and wellfaire, [3'] and good sped in your matters, [6] shewyng yow that I and all your children is in good healths, [7] blessed be Jehsu, [2b] and prays yow for your blessing.⁽⁴⁸⁾

甥サー・ウィリアム・ギヤスコインのパターン

これまでサー・ロバートのいとこや義理の息子、妻といった、サー・ロバートより目下の者の手紙に見られた、尊敬表現を多用したあいさつ部分のパターンを見てきた。それに対して、この甥の場合はやや事情が異なっている。サー・ロバートの親戚のなかで、おそらく最も権勢のある人物は、彼の甥サー・ウィリアム・ギヤスコイン (Sir William Gascoigne) (一五五一年没) であろう。母は第三代ノーサンバランド伯ヘンリ・パーシイ (一四六一年没) の娘マーガレットである。第四代伯は、サー・ロバートを 'cousin' としか呼ばなかったけれども、ウィリアムを 'my nephew' (LB, no.40 (p.27)) と呼びその父 (一四八七年没) を 'brother' (LB, no.55 (p.33)) と呼んでいる。一四八七年一月二五日、まだ未成年であったにもかかわらず、ウィリアムは、ヘンリ七世妃エリザベスの王妃戴冠に列席して騎士に叙されている。ヘンリ七世治下、サー・ウィリアムは地域の役職を歴任し、地域の最も有力なジェントリであった。⁽⁴⁹⁾ サー・ロバート宛ての手紙五通が現存するが、そのうちの四通までは、以下のような全く同じシンプルなあいさつ表現である。'Vncle Plompton, I recomend me vnto you'⁽⁵⁰⁾ ちなみにサー・ウィリアムの叔父である準騎士ジョン・ギヤスコインから、義兄弟にあたるサー・ロバート宛ての手紙が一通だけ現存するが、そのあいさつ部分もよく似ている。'Brother, I recomend me vnto yow' (LB, no.129 (p.78) 「日付不明」) このようにギヤスコイン家の人間は、パーシイ家との関係や地域における家格の高さを

匂わすかのように、やや傲慢とも言えるあいさつ表現を、サー・ロバートに対して用いている。⁽⁵¹⁾

ここまで四人の手紙に見られる、あいさつ部分のパターンを見てきた。次にこのようなパターンが変化したり、あるいは序列のルールから逸脱していたりする例に目を向けてみよう。そして変化や逸脱の理由を、それらの手紙の内容と関連させて検討してみることにしよう。

(二)

あいさつ部分のパターン変化はなぜおこるのか——ロバート・エアの場合

準騎士ロバート・エア (Robert Eyre) (一五〇二年没) は、一四九九—一五〇一年に四通サー・ロバート宛の手紙を書いている。彼はおそらく前述のジャーマン・ド・ラ・ポウル死後、その跡を継ぎ、サー・ロバートのダービーシャーにおける所領の執事となった。彼の息子は、一四九九年以前に、サー・ロバートの娘マーガレットと結婚している。⁽⁵²⁾

彼の手紙のうちの二通 (ともに一五〇一年) は、'Right worshipfull brother, I recomend me vnto you & to my lady your wiffe & to my daughter Margaret..' というシンプルなあいさつ表現で始まる。これらの手紙のなかで、ロバート・エアは、前述のシュロウズベリ伯ジョージ・トールボットに会う手はずを整えてほしいという、サー・ロバート・プランプトンの願いをかなえ、またサー・ロバート・プランプトンを相手におこされた訴訟の審理予定や陪審名簿を知らせたりしている。⁽⁵³⁾ それに対し、一四九九年および一五〇〇年の二通は、'Right worshipfull brother, I recomend me vnto you & to my lady & also to my daughters & yours, with all my other yong cousins, [3]desirying hartely to here of your weltaire & theres both, [4]which I bescech Jesu preserve vnto His pleasure & your harts comforth..' 前者二通とは異なり、より丁寧な表現で始まっている。こちらの手紙でロバート・エアは、寡婦になった農場管理人の妻が、夫の跡を

継げるよう配慮してほしい旨嘆願し、「そうなさることが、必ずやあなた様の名誉 (worship) と同時に利益となるでしょう」と述べたり (no.107)、難航している両家の結婚契約書文案の作成に関して提案し、おそらくその際に取り決められた持参金の一部の支払いを督促している⁽⁵⁴⁾ (no.102)。

シンプルなあいさつ表現である前者二通では、ロバート・エアが、サー・ロバート・プランプトンにいわばサーヴィスを提供しているのに対して、より丁寧な表現になっている後者二通では、ロバート・エアが、サー・ロバート・プランプトンからサーヴィスを受けることを期待している。つまり彼は、自分がサー・ロバートの好意を期待する場合、より丁寧なあいさつ表現を意識して用いていることがわかる⁽⁵⁵⁾。このことは、あいさつ部分のパターン変化がなぜおこるのか、その理由の一端を説明してくれる。

あいさつ部分のパターン変化はなぜおこるのかーデイヴィッド・アップ・グリフィスの場合

デイヴィッド・アップ・グリフィス (David ap Griffith) は、一四九〇年に一通、一四九二年に二通、サー・ロバートに宛てて手紙を書いている。彼は、ランカスタ公領の北部総執事 (chief steward in the North Parts) であった初代ダービー伯トマス・スタンリー (1st earl of Derby, Thomas Stanley) (一五〇四年没) の家政における主要な成員の一人であり、ダービー伯の遺言執行人の一人に選ばれたほどである。また前述したエドワード・プランプトンの義兄でもあった⁽⁵⁶⁾。

デイヴィッド・アップ・グリフィスは、サー・ロバートに土地を貸している。最初の手紙は、その土地貸借契約書作成に関するものであり、あとの二通はサー・ロバートが支払うべき地代に関する内容であった。最初の手紙は、'Right worshipfull sir, I comend me to you ...' で始まり、'Your Davy Hervy [David ap Griffith]' で終わる (LB, no.170 (p.110) [1490/8/31])。この二通は、'Right worshipfull sir, I recomend me to your mastership...' で始まり、末尾に 'your owne servant' (LB, no.138 (p.84) [1492/2/3]) 又は 'from your servant' (LB, no.139 (p.85) [1492/10/8])

と書かれている。サー・ロバートが、デイヴィッド・アップ・グリフィスの土地を借りる契約を交わした後、あいさつ部分の表記の仕方が変化したという点が重要である。つまり両者の間に、土地保有者とそのテナントという、土地を媒介とした関係が成立したことが、あいさつ部分の変化、すなわち ‘mastership’ と ‘servant’ という表現の導入につながっていることがわかる。⁽⁵⁷⁾このように、手紙の差出人と受取人の間に新たな関係が生み出されたときにも、それに応じて手紙のあいさつ部分の表現が変化することが明らかになった。

身分・階層序列にそった書き方ルールからの明らかな逸脱は、何を意味しているのか――モウド・ロスの手紙

最後に、あいさつ部分の書き方が、身分・階層序列のルールから明らかに外れている例をとりあげ、その理由を考えてみよう。

寡婦であるモウド・ロス (Maud Roos) は、一五〇四年(?)に、サー・ロバートに宛てて次のような手紙を書いた。

‘To Sir Robert Plompton of Plompton, knight be these deliuered’

‘Sir, after my dowte of come[n]dations remembering, in my most hartly manner I recomend me vnto you. ... I cannot get my money [which I lent you]. Therefore I desire yow to send me word how I shalbe answered of yt, by this bearer... If yow will not send me word how I shall have yt, I wyll take my next remedy, that yow shall well know, yt shalbe to your paine... Written at Killinghall by your loving & ffrind Mawd Rose’ (LB, no. 127 (p.77) [1504?]).

(宛名書き) プランプトンの騎士、サー・ロバート・プランプトン殿に、配達されたし

(本文) 前略⁽⁵⁸⁾、心からごあいさつ申し上げます。・・・「お貸しした」私のお金をまだ返してもらっておりません。返済予定に関し、この手紙の使者に伝言願います。・・・きちんとした返答がいただけない場合には、さらなる手段をとらざるを得ません。その手段がどのようなものであるか、あなたはよくご存知のはずです。あなたにとって痛手となることでしょう。・・・

キリングホールにて。おん身の親友モウド・ロスより。

この手紙には、‘worshipful’も‘mastership’も見られず、宛名書きやあいさつ部分ともにシンプルである。モウド・ロスは貴族出身ではない。サー・ロバートから見れば目下であるはずのこの女性が‘friend’⁽⁵⁹⁾という言葉にあたかもサー・ロバートと対等であるかのように用いているのはなぜだろうか。

一般に女性は、前述したアグネスの手紙に見られるように、非常に丁寧なあいさつ表現を用いるのが普通であった。本稿では特に手紙の文末や結びの句に関して検討する余裕はなかったが、レター・ブックに登場する女性でサー・ロバートの妻や姉妹以外は、ほとんど、手紙の末尾に‘your beadswoman’⁽⁶⁰⁾（あなたのしもべ）という表現を用いている。身分・階層序列のルールに従えば、彼女はレター・ブックのなかで唯一の例外的な女性である。だとすればその理由を、手紙の内容と照らし合わせて考えてみる必要がある。

モウドは、準騎士トマス・ロス (Thomas Roos of Ingmanthorpe, esquire) (一五〇四年没?) の後妻であり、夫トマスの遺言執行人でかつ残余財産受遺者であった。⁽⁶¹⁾ だから亡き夫の遺産管理者 (債権者) の立場から、ビジネスライクに (あえて性別にこだわらずに) 督促状を書いたのかもしれないと想像することも可能である。しかし、社会的に対等な者の書き方をあえてとるほうが、貸し倒れ金の回収に本気で取り組む意志があることを、相手に効果的にわからせることが出来ると、モウド・ロスは考えていたのではないか。女だからと甘く見て借金を踏み倒したら承知しないぞ、訴えてやる

からあとで後悔するなよという思いがそこには込められていると考えた方が、より説得力がある。このように考えると、モウド・ロスの例は、身分・階層序列のルールに従ったあいさつ部分の書き方から、あえて逸脱する理由を説明してくれる好例と言えるだろう。

あいさつ部分を巧妙に用いた手紙―ヘンリ・ハドソン師の例

もう一つだけ、あいさつ部分が巧妙に用いられている手紙があるのでそれを紹介したい。それは、一四八六年頃、ヘンリ・ハドソン師 (Master Henry Hudson) によって書かれた以下の手紙である。

Reverend & my right trusty good master, due reuerence done, know ye I am at your comaundment with prayer for yow, my gode lady your wyfe, & mother, & your children. My lord faryth well & recomends him vnto yow, with hartly thanks of your good and fast love, which he entendeth to content your mynd for... (LB, no.165 (p.107) [c.1486]).

畏敬し信頼するよきご主人様、いつもとても畏敬し、あなた様の命に従い、あなたとご家族様のご健勝をお祈り申し上げておくことをお見知りおきください。ところでご主人様 (第四代ノーサンバランド伯) があなた様によろしくとおっしゃっております。あなた様の揺るぎない好意あるよき行いを心から感謝しております…

これだけでこの手紙の約半分の長さにあたるが、このようなあいさつ部分のあとに用件が続く。その内容は、スポフォス教区教会代理司祭と、サー・ロバートとの間の係争に関し、伯の仲裁裁定に従うよう勧めるものであった。前掲註(38)で述べたように、スポフォス教区教会代理司祭の推挙権は、ノーサンバランド伯が有していた。従って一見この手紙は伯

の代理で用件を伝えているようにも見える。しかしハドソン師は、スポフォス教区教会代理司祭のもとで、その助手を務める人物であった。⁽⁶²⁾従って実際に要求しているのは、ハドソン師自身であると考えられる。仲裁に従う旨を記した保証証書を、伯に対してでなくハドソン師に対して書くよう、この手紙は要求していることから、それは明らかである。

この手紙では、自分のあいさつ部分に続けて、主人（サー・ロバートにとってもロードにあたる）である伯のあいさつを差し挟むことで、自分の側にロードの後ろ盾があることを暗示し、それによって自分の依頼をサー・ロバートに確実に実行してもらうことをねらったものだと考えられる。厳密にいうとこの手紙は、書き方ルールからの逸脱ではない。しかしながらあいさつ部分が少し変えて用いられていることから、手紙の差出人の意図がかえって明らかに理解され得る。このように巧妙にあいさつ部分を用いている手紙の例からは、あいさつ部分が持った、単なる儀礼以上の意味を伺うことが可能であろう。

おわりに

サー・ロバート・プランプトンの手紙一七一通を調べてみた結果、当時の手紙を書く者は、その手紙を受け取る者との関係を、とりわけ手紙の冒頭のあいさつ部分で、明確に示す必要があったこと、そして相手との関係が複雑で微妙な場合、非常に微妙な表現を書き連ねることも、時には必要だったことが明らかになった。このような理由から、十五世紀のジェントリの手紙は、あいさつ部分が長かったのだと思われる。

さらに、身分・階層序列にふさわしいあいさつ部分を書くというルールから、時として逸脱しているように見える例もあった。しかしそのような手紙の内容を見ると、逸脱にはそれなりの意図を伺うことができる。その意図を、ひとことで言い表すならば、奉仕＝頼み頼まれること（services）となる。ホロックスによれば、十五世紀イングランド社会で生きてゆく上で必要なすべての局面において、あらゆる種類の双務的なサーヴィスが日常的に必要不可欠なものとなってい

たという⁽⁶³⁾。サー・ロバートの手紙からは、手紙の差出人が、受取人に何らかの頼みごとをしたりあるいはされたりする場合には、社会的身分の上下を問わず、その手紙のあいさつ部分を意図的に書式から逸脱させて書く場合があることがわかった。よく利く疫病除けのおまじないを教えることからはじまって、地代を迅速に払ったりあるいは払われたり、お金の貸し借りや、訴訟に関する法的助言のやりとり、陪審団のメンバーや、新任のシェリフの名を誰よりも早く教えること、敵か味方かを本人に代わって見極めること、有力者の仲裁を斡旋することあるいは斡旋を頼むこと、訴訟幫助などなど、これらがサー・ロバートの手紙に登場する「頼み頼まれること」であつた⁽⁶⁵⁾。サー・ロバートの手紙からは、これらのサー・ヴィスこそ、書式から逸脱したあいさつ部分を書く理由の第一であつたことがわかる。

同時に、手紙の差出人と受取人との社会的関係は、表面的な身分階層による上下関係とは別に、このような「頼み頼まれる関係」を通してそのときで変化していると考えられる。手紙の差出人が、そのときどきの頼み頼まれる関係によって微妙に変化している相手との関係を、手紙に精確に反映させることが、手紙の効力を高める大きな決め手になっていたからこそ、この時代、手紙のあいさつ部分は長かつたのではないだろうか。

従って、身分・階層序列にふさわしいあいさつ部分を書くというルールに従うことでジェントリ社会内部のヒエラルキーを明示化しそれを維持してゆくメカニズムが、手紙のあいさつ部分を分析することで明らかにされるであろうことは論を待たない。けれどもむしろそれ以上に興味深いことは、ルールからの逸脱を見ることで、表面的で一見固定的な身分階層による上下関係とは別に、*services* を介して決まるその時々⁽⁶⁶⁾の社会的関係を明らかにし、それによって十五世紀の社会が持っていたダイナミクスを明らかにしてゆくことではないだろうか。

註

*本稿は、平成十一—十三年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））『史料が語る中世ヨーロッパ—実証研究と史料

分析の手続き—』（課題番号11410102）研究代表者國方敬司、による研究成果の一部であり、二〇〇〇年九月二七日にロンドン大学歴史学研究所（Institute of Historical

Research)で行われた、第三回日英歴史家会議での口頭報告、および日本西洋史学会第五一回大会中世史部会Ⅰ(二〇〇一年五月二三日、於、東京都立大学)での口頭報告をもとに加筆修正したものである。日英歴史家会議における報告の機会を与えて下さったことに関し運営委員の方々に感謝するとともに、司会を務めて下さったマイクル・克蘭チ博士(Dr Michael Clanchy)‘コメント’のバリー・ドブソン教授(Prof. Barrie Dobson)並びにキャロライン・バロン博士(Dr Caroline Barron)らによる有益なコメントに対し感謝の意を表したい。

(1) Norman Davis, 'The LITERA TROLLI and English Letters', *Review of English Studies*, new series, XVI (1965), pp.233-244, esp. p.236.

(2) *Ibid.*, pp.236-7.ただし、引用にあたっては、Norman Davis ed., *Paston Letters and Papers of the Fifteenth Century* vol.1 (Oxford 1971), p.206.を用いた。表記はほぼ原文のままであるが、ソーンは、**三**に改めた。また省略を元に戻した部分は、イタリックで示した。現在は一語で書かれるが、元のマニスクリプトでは、二語にわけられている場合、ハイフンで示した。□は、欠落を補っていることを示す。以下の引用についても同様。

(3) *Oxford English Dictionary* によれば、'commend me to you'は、あなたへの好意をつつしんでお伝えしますとい

う意味であり、'recommend me to you'は、あなたのご好意に我が身を委ねますという意味であるらしい。いずれも例を『パストン家書簡集』から引用しているが、十五世紀における英語表記上の不統一を考慮するならば、厳密な意味上の区分をすることは史料からは難しいと思われる。そこで本稿では便宜上、「よろしくあいさつ申し上げます」と訳すことにした。

(4) デイヴィスによれば、七区分したそれぞれの内容は以下の通り。「1」敬称。たいていは'Right'で始まり、敬意を示す'worshipful', 'worthy', 'well-beloved'などで形容された、相手に呼びかける名詞('sir', 'husband'など)から構成される。「2」手紙の差出人から、相手へのあいさつ定型句。しばしば、「2a」謙遜の表現を伴い、相手が親なら「2b」祈りを求めるという表現が加わる。「3」相手の安寧や消息を聞きたいという表現。「4」相手の意にかなって、相手がますます健勝であることを神に祈念する表現。「5」手紙の差出人が、自分の消息をこれから述べることを、相手に丁寧に伝える表現。「6」この手紙を書いている時点で、差出人が健康であることを報告。「7」そのことを神に感謝する表現。Davis, *Review of English Studies*, p.236.

(5) Norman Davis, 'The Language of the Pastons', *Proceedings of the British Academy*, XL (1955), pp.119-144.

(6) 後述、一一四—一一五頁参照。

(7) 後述、一二三頁参照。

(8) 『パストン家書簡集』は、イースト・アングリアのジェントリ家系がのこしたもので、五つの史料のなかで最も大部なものである。註(2)で挙げたデイヴィスによる版(2vols, 1971-6)が最もオリジナルに忠実。しかし、James Gairdner ed., *The Paston Letters 1422-1509* (6 vols, 1904, rep. New York 1965) が利用しやすいためにしばしば用いられる。また、拙稿「マーガレット・パストンの遺言書一通の遺言書が語る、一五世紀イングランドのジェントリ女性」『お茶の水史学』四三(一九九九年)、八三―一二八頁、特に一一〇頁、註(11)参照。『スタナー家書簡集』は、オックスフォードシャーのジェントリ家系がのこしたもので、新しい版は、Christine Carpenter ed., *Kingsford's Stonor Letters and Papers 1290-1483* (Cambridge 1996)。ただし転写の不正確さが指摘されている。Alison Hanham, 'Varieties of Error and Kingsford's Stonor Letters and Papers', *The Ricardian*, CXLII (1998), pp.345-352 によれば、不正確な転写である点では、キングズフォードの旧版も同じであるという。『プランプトン家書簡集』は、ヨークシャーのジェントリ家系がのこしたもので、Joan Kirby ed., *The Plumpton Letters and Papers* (Camden Society 5th series vol.8, 1996) が新版。Thomas Stapleton ed., *The Plumpton Correspondence* (Camden Society o.s. vol.4, 1839), rep. with a new introduction by Keith Dockray

(Gloucester 1990) が旧版。新版は、最近の研究成果を盛り込み、さらに旧版にない史料を付け加えているが、史料の転写部分は誤植がひどく使用に耐えない。ステープル商人兄弟がのこした『シーリィ(セリー)家書簡集』は、カーペンタとキングズフォードの版の不正確さを批判したアリソン・ハンナムによる新版がある。Alison Hanham ed., *The Cely Papers 1472-1488* (Early English Text Society no.273, 1975)。最近再発見された、ウォリクシャーのジェントリ夫妻が交わした手紙は、Christine Carpenter ed., with an introduction, *The Armburgh Papers. The Brokholes Inheritance in Warwickshire, Hertfordshire and Essex c.1417-c.1453 Chetham's Manuscript Mun. E.6.10(4)* (Woodbridge 1998)。

中世後期イギリスの手紙史料一般に関してはC. L. Kingsford, *English Historical Literature in the Fifteenth Century* (Oxford 1913), esp. chap. VIII: Correspondence: Private and Official, pp.193-227; C.L. Kingsford, *Prejudice and Promise in the Fifteenth Century England* (1925, rep. 1962), esp. chap. II: English Letters and the Intellectual Ferment, pp.31-34; John Taylor, 'Letters and Letter Collections in England, 1300-1420', *Nottingham Medieval Studies*, XXIV (1980), pp.57-70 を参照。

十五世紀に英語で書かれた手紙は、いっただいどれくらい現存するのだろうか。キングズフォードやテイラーの研究

を参考に、主なコレクションとその概数や史料の所在を調べてみた。『バストン家書簡集』は、八二七通（送ったもの三五五、受け取ったもの四八二通）、『スタナー家書簡集』は、一三三七通（P(ublic) R(ecord) O(ffice), SC1/46 中心）、『アラント家書簡集』は、一三三九通（W(est) Y(orkshire) A(rchive) S(ervice), Leeds District Archives), LC 01731/2-9; Chambers MSS 2—9）、『シーリー家書簡集』は、一四七通（ただし関連史料も含む概数。PRO, SC1/53 に一九四通、SC1/59 に四七通など）、それに『アーヘム家書簡集』は、八〇通であった。以下は必ずしもシェルトリの手紙ではない。Henry Ellis ed., *Original Letters, Illustrative of English History; Including Numerous Royal Letters: From Autographs in the British Museum, the State Paper Office, and One or Two Other Collections* (7 vols, 1824-46, rep. 1969, 11vols, with a new introduction by J.L.Kirby)*. 1st series vol.1 (1824) に三三三通、2nd series vol.1 (1827) に五九通、3rd series vol.1 (1846) に三〇通、あわせて一三三二通。（但し王侯の手紙が中心で、多くは、B(ritish) L(ibrary) のコレクションからエリスが集めたものであり、BL, Cotton. Vespasian F iii and xiii, Add. MSS. 4596-616 などが中心）。これらはロールズ・シーリーの巻との重複も多く見られる。（J. Stevenson ed., *Letters and Papers Illustrative of the Wars of the English in France During the Reign of Henry the Sixth, King of England* (2vols

,1861-4)*; James Gairdner ed., *Letters and Papers Illustrative of the Reigns of Richard III and Henry VII* (2vols,1861-3)*など。しかし Hubert Hall ed., *A Formula Book of English Official Historical Documents*, part I (1908, rep. New York 1969) も述べているように、これら国王の手紙として編纂されている史料の中には、国王証書の一部も含まれ、公文書としての性格が強いものが多い。R.W. Chambers & M. Daunt eds., *A Book of London English 1384-1425* (Oxford 1931) に約一〇通（国王や市長の手紙。MS Guildhall, Letter-book I など）。S. A. Moore ed., *The Letters and Papers of John Shillingford, Mayor of Exeter 1447-50* (Camden Society n.s. vol.2, Westminster 1871) に一七通。（エクセター同教対市の裁判権を巡る争いに関する市長の公開書簡など、Exeter City Archives）。John H. Fisher, M. Richardson, J.L. Fisher eds., *An Anthology of Chancery English* (Knoxville 1984)*に約一四〇通。（PRO とBLにあるく亨利五世の Signet lettersや、その後の Privy Seal papers から、公的書簡における英語の使用例を集めたもの。く亨利五世の手紙における書き出し部分 (salutation) の分析は、pp.5-9. を参照。petitions も含める）、一三三一通、そのうち既出分 (p.xii) 及び SC1 のものを除く、約一四〇通）。

他に、未見だがキングズフォードが言及しているもの (pp.211-227) として、N.H. Nicolas ed., *Proceedings and*

Ordinances of the Privy Council of England (Record Commission 7 vols, 1834-7). * F.C. Hingeston ed., *Royal and Historical Letters During the Reign of Henry IV* (Rolls series 2vols, 1860-1965). * Cecil Monro ed., *Letters of Queen Margaret of Anjou and Bishop Becketton and Others: Written in the Reigns of Henry V. and Henry VI. from a MS. Found at Emral in Flintshire* (Camden Society, Westminster 1863). また*印の史料集と一部重複するが、国王の手紙については、J. L. Kirby ed., *Calendar of Signet Letters of Henry IV and Henry V (1399-1422)* (HMSO 1978) に省録がある。それによると、ヘンリ五世の場合、手紙が英語になるのは一四一七年九月以降であるという。

以下は、未公開の史料である。キングズフォードによれば、PRO, SC1/43,44,51,57,58 に約三〇〇通以上あるという(先ほどのスタナーとシーリイの一部を含む)。しかし筆者が確認したところでは、その後にもある。ちなみに、SC1/60—64 には、七五通の英語の手紙があった。そのなかには、Carpenter, *Kingsford's Stonor Letters* に未収録の手紙もあった (PRO, SC1/62/86,93, SC1/63/311,312, SC1/63/311 については、拙稿「ユーアルム救貧院と来世の「宮廷」—サファク公夫人アリスとスタナー家」、高山博・池上俊一編『宮廷と広場』刀水書房、二〇〇二年所収一八七—二〇五頁を参照)。Petition も勘定にいれるなら、PRO, SC8 (petitions to Parliament) * C49 (Parliamentary

Proceedings) * C1 (Early Chancery Proceedings) の一四五五年以降も調査する必要があるだろう。さらに各州文書館に、英語の手紙は断片的ではあるが無数に存在している。例えば、West Yorkshire Archive Service のオンラインカタログ <http://www.ds.co.uk/dservea/> や、correspondence or letter 15-16 century で検索すると、公的な手紙がほとんどだが、family archives のなかに、数十の書簡を見つけたことが出来る。

(5) the 'diplomatic' of letter evidence を表現している。Christine Carpenter, 'The Stonor Circle in the Fifteenth Century', in Rowena E. Archer and Simon Walker eds., *Rulers and Ruled in Late Medieval England* (1995), pp.175-200, esp. p.178. のようにされた手紙の多くは実務的な内容が中心であり、『パストン家書簡集』を除いては、家系の主要な成員宛てのものだけであること、手紙に登場する人物は何らかの意味で法実務家に偏っていること、詳細を口頭で使者が伝えるという慣習による、手紙の内容のあいまいさ、といった限界をカーペントは指摘している。従ってジェントリの知人・近隣関係を探るには、手紙だけでは不十分であるという。しかしながら、ジェントリの家系文書を丸ごと使うこと、つまり手紙史料と他の家系文書をつきあわせて利用することにより初めて、ジェントリの社会的ネットワークの全体が解明され得ることを主張した。

史料類型としての手紙については、Giles Constable,

- Letters and Letter-Collections (Typologie des sources du moyen âge occidental 17, Turnhout 1976) があるが、十分とは言えない。また、甚野尚志「中世における書簡とコミュニケーション」『西欧の歴史世界とコミュニケーション』平成十二年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書（課題番号10410089）、研究代表者桜井万里子、二〇〇一年、四八―五一頁を参照。
- (10) 'Ryght Wurshypful and trusty Cosyn, y commende me un-to yow... as a Jantylnman not gretly acqueyntdyd with yow, trustyng yn tyme to come to be better acqueyntyd with yow'. Carpenter, in R. E. Archer and S. Walker eds., *Rulers and Ruled*, p.185; PRO, SC1/60/1 line1-2. 史料引用部分はオリジナルから筆者が転写した。表記法は、註(2)に同じ。以下も同様に、史料の引用に関しては、可能な限りオリジナルから直接自分で転写したものをを用いることとする。但し、オリジナルを参照できなかった場合や史料解題に関しては、刊本に依拠した。
- (11) Carpenter, in R. E. Archer and S. Walker eds., *Rulers and Ruled*, pp.198-9.
- (12) Carpenter, *The Armburgh Papers*, pp.43-4.
- (13) Davis, *Paston Letters*, vol.1, pp.xxxv-xxxix; table of authors and clerks, pp.lxxv-lxxix; Norman Davis, 'The Text of Margaret Paston's Letters', *Medium Aevum*, XVIII (1949), pp.12-28, esp.pp.15-6.
- (14) Diane Watt, "No Writing for Writing's Sake": The Language of Service and Household Rhetoric in the Letters of the Paston Women', in K. Cherewatuk and U. Wiethaus eds., *Dear Sister: Medieval Women and the Epistolary Genre* (Philadelphia 1993), pp.122-138, esp. p.127.
- (15) Davis, *Review of English Studies*, pp.240-2; Taylor, *Nottingham Medieval Studies*, pp.57-70 も、『スタナー家書簡集』のなかの十四世紀に書かれた手紙を挙げて、同様の議論をしている。
- (16) Ellis, *Original Letters*, 3rd series vol.1 (1846), pp.x-xi. 但しオリジナルは未見。
- (17) 中世のレトリック研究に関しては、J.J. Murphy, *Medieval Rhetoric: A Select Bibliography* (Toronto 1971). オックスフォード大学のThomas Sampson (fl. after 1355) の書簡作成教師と書簡作成の技芸 (Ars Dictaminis) に関しては、H.G. Richardson, 'Letters of the Oxford Dictatores', in H.E. Salter, W.A. Pantin, H.G. Richardson eds., *Formularies Which Bear on the History of Oxford c.1204-1420* (Oxford Historical Society n. s. nos 4,5, Oxford 1942), pp.329-450. 亦だ、W.A. Pantin, 'A Medieval Treatise on Letter-Writing, with Examples, from the Rylands Latin MS. 394', *Bulletin of the John Rylands Library*, XIII (1929), pp.326-382. (なお入手にあたり、慶應義塾大学、古武書司

氏のお世話になった。記して感謝したい)。チャンセリ(国王尚書部)と、Ars Dictaminis の関係、さらにチャンセリ・イングリッシェについては、Martin Camargo ed., *Medieval Rhetorics of Prose Composition: Five English Artes Dictandi and Their Tradition* (New York 1995), pp.10-20, 31; John H. Fisher, 'Chancery and the Emergence of Standard Written English in the Fifteenth Century', *Speculum*, LII(1977), pp.885-87; John H. Fisher, M. Richardson, J.L. Fisher eds., *An Anthology of Chancery English* (Knoxville 1984). 十五世紀に「標準的な」書き言葉の英語がどのようにして形成されていったのかという問題関心から、ここにまとめたものと同様の議論を『スタナ一家書簡集』を史料として展開した研究に、M. P. Relihan, 'The Language of the English Stonor Letters, 1420-1483', unpublished Ph. D. thesis, The University of Tennessee, 1977 がある。この研究によれば、中央の国王尚書部に関係の近かったものほど、ルールや書式にきちんと従った手紙を書いていることが認められるという。

なおカマルゴによれば、ルネサンス人文主義者たちの書簡モデルが十六世紀に影響力を持つにつれて、チャンセリ・イングリッシェの影響は失われていったという。十六世紀の英語で書かれたマニュアルとして例えば、William Fulwood, *The Enimie of Idleness: Teaching How to Indite, Epistles* (n.p. 1568) などがあるが、これらで手本として取

り上げられているのは、中世の dictatores ではなく、エラスムスであるという。Camargo, *Medieval Rhetorics*, p.32. ただしイタリア人文主義の影響をもっと通って主張する研究もある。R. Weiss, *Humanism in England during the Fifteenth Century* (Oxford 1941), pp.74-5. また *Codex Streeterianus: codex humanisticus in artem epistolariam bibliothecae universitatis tokiensis, A100.1300 phototypice editus ac transscriptus accedentibus operum et lectionum indicibus / editionem curavit et praefatus est Koji Nishimoto; adiuvantibus Hideo Katayama ... [et al.]* (Tokyo 1987) および、『十五世紀イタリア人文主義者の書簡・論考の研究』昭和六一年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書(研究課題番号 59510236)、研究代表者 西本晃二、一九八七年。Weissの研究および東大所蔵のラテン語書簡文例集とその研究に関しては、城戸毅氏の指示による。記して感謝したい。

- (18) Goe lytyll byll, and doe me recomende
Unto my lady with godely countynaunce...

(T. Duncan, *Late Medieval English Lyrics and Carols 1400-1530* (2000), p.52 聖母マリアを歌った詩。手紙の書き方のフォーミュラ(epistolary formula)であるとの註がある。Ibid., p.208).

Go, litull bill, and command me hertely
Unto her that I call my trulof and lady...

(Duncan, *Late Medieval English Lyrics*, p.19. *trulof* は宮廷風世俗恋愛詩。ともに下線部は筆者による。bill は letter' trulof は true-love のこと。この詩は、一五〇〇年頃書かれた、チェシャの準騎士ハンフリ・ニュートンのコモンプレイス・ブックに収録されているものであるという。Ibid., p.192.)

先に挙げた聖母マリアを歌った詩のほうが、デイヴィスの七区分に従うなら「2」の部分がより複雑で表現が丁寧である。なお、これらの詩の存在および文献に関しては、上野未央氏（お茶の水女子大学人間文化研究科博士課程）のご教示による。記して感謝する。また一四〇〇年頃書かれた『アーンバラ家書簡集』には、ラブレターとしての詩があるが、その書式は、手紙の書き方のフォーミュラにきわめて近い。（Carpenter, *The Armburgh Papers*, pp.58, 155, 165）.

(61) Nicholas Orme, *English Schools in the Middle Ages* (1973), pp.70.

(20) 筆者が説明を補った部分はカッコで示している。下線部も筆者による。Ellis, *Original Letters*, 3rd series vol.1 (1846), p.xii. 十三世紀初期にイギリスで書かれた、もとウエストミンスター修道院が保有していた書簡作成技法に関するマニュスクリプト。現在、ブリテイッシュ・ライブラリ所蔵。BL, Additional MS 8167. 但し未見である。Camargo, *Medieval Rhetorics*, p.21. および Martin Camargo, 'The

English manuscripts of Bernard of Meung's Flores Dictaminum' *Viator*, XII (1981), pp.197-219 を参照。

(21) Kirby, *The Plumpton Letters*, pp.2, 234-6.

(22) 拙稿「十五世紀のプランプトン家と結婚 イングランド北部における一ジェントリ家系の視点から」、樺山紘一編『西洋中世像の革新』刀水書房、一九九五年所収、三五―三七二頁、特に三五―三五六頁参照。

(23) 史料の状況や、今回の分析に用いる上で留意すべき点について、ここで整理しておきたい。

パストン家とシーリイ家、アーンバラ家の手紙、それに刊本に誤植は多いもののスタナー家の手紙は、少なくとも十五世紀のオリジナルあるいはその同時代の写しである。また、商人のビジネス書簡中心のシーリイを除き、書式に踏み込んだ研究がそれぞれ存在することは、前述の通りである。それに対しプランプトン家の手紙に関しては、書式についての言及がほとんどない。Kirby, *The Plumpton Letters*, pp.20-1 が、わずかに書式の典型につきふれているだけである。それというのも、プランプトン家の手紙だけが、中世のオリジナルではなく、十七世紀の転写しか現存していないからであろう。本稿で扱う、プランプトン家のオリジナル史料とは、この十七世紀の転写を意味している。従ってこの転写本がはたして史料として十分信用できるのか、この点について答えを出しておかなければ分析を先に進めることは出来ない。

現存するプランプトン家関係の史料は、West Yorkshire Archive Service の Leeds District Archives に保管されている。十五、十六世紀の手紙を転写した、レター・ブック (Sir Edward Plumptre's Letter-Book, WYASL, LC01731/2; Chambers MS 2) と、家系の重要な証書類を転写したカーチュラリ (The Coucher Book, WYASL, LC01731/3; Chambers MS 3) がその主なものであり、いずれも十七世紀初頭、当主の命によりおそらくオリジナル史料から転写されたものである。その後、書簡や証書のオリジナルは散逸してしまい現存していない。(史料の詳細については、John Taylor, 'The Plumptre Letters, 1416-1552', *Northern History*, X (1975), pp.72-87を参照)。それぞれの史料の概要をまずみてみよう。

一、レター・ブック (以下、LBと表記)

ばらばらの紙に転写したあと、羊皮紙の表紙をつけて製本されたもの。各頁には頁数が、そしてそれぞれの手紙には番号が振ってある。頁数は、最初から順に一貫しているが、手紙の番号は、途中からまた一から始まっていて、重複が見られる。Taylor, *Northern History*, p.76によれば、全二一六頁だったが、最初の二六頁が失われてしまっているという。現存する部分の内容は大きく三部に区分できる。順に、(1) 主に Sir Robert Plumptre (一五二三年没) 宛て一七四通、LB, pp.27-149. (2) Sir William Plumptre (一四〇四年—一八〇年) 宛て二九通、LB, pp.151-79. (3)

主に William (一五四七年没) and Mrs Isabel Plumptre 宛て三五通、LB, pp.181-216. である。(1) (2) は、一六二二年から一三三年に、(3) は、一六二六年に転写された。転写された当初は、(2)、(1)、(3) の順番に綴じられていたらしい。レター・ブック欄外や本文の行間には、細かな文字訂正のあとがいくつか見受けられる。このことから、転写者が、オリジナルの一字一句を正確に書き写そうと努力したことが窺われる。また欄外に「この手紙には印章が付されている」と記述されているものもあるが、そこから、転写者はオリジナルの手紙を目の前にして作業を行っていたことがわかる。オリジナルがどうしても判読できなかった部分については、その旨が欄外に記してある。それ以外は、ミスは少なくプロフェッショナルな書記の手による正確な転写である。

各部分内では、手紙は年代順でなく、おおむね手紙の差出人の社会的身分の序列にそって編まれている。この点はいずれも重要となるので、少し詳しく述べることにしよう。例えば本稿で扱う、サー・ロバート・プランプトン宛中心の(1)には、一七四通 (nos 38—211) の手紙が含まれている。nos 38—58 (55を除く) は、伯 (4th & 5th earls of Northumberland) からの手紙、nos 59—69 は、ニューバラ小修道院長 (the prior of Newburgh) などの上級聖職者たちからの手紙、nos 70—74 は甥から、nos 75—79 は縁者 (cousin) から (但し 75 と 79 はサー・ロ

パート宛てではない)、no. 80 は(義理の)兄からの手紙、no. 81 はヨーク市長から、nos 82-90 (85, 86 を除く) は妻から、nos 91-101 は息子や娘 (nos 94-101 は娘婿) から、nos 102-9 は義理の弟・妹から(但し、単に brother と表記されているが)の手紙、以下家族・親族以外の手紙・・・というように編まれている。また一七四通のうち、サー・ロバート宛でないものは一一通混じっているが、いずれも手紙の差出人と受取人との関係が同じ種類であるような場所に紛れ込んでいるという特徴がある。このように見てくると、レター・ブックが編まれた際、手紙の差出人の身分・階層序列や、受取人との関係に応じて細かく分類するという意図がそこに働いていたことは明らかである。

さらに転写者が記した手紙の番号および転写した日付を見てゆくと面白いことがわかる。(2)の転写は一六二一年十二月八日(no. 1)から始まり、一六一三年二月一日(no. 29、当時の表記法に従い、一六一二年二月一日と記されている)に終わっている。二九通の転写に約二ヶ月かかり、一日に多くても数通程度であった。次いで日をおかず(1)の転写に取りかかったらしい。現存するものは、一六一三(表記は一六一二)年二月二二日、no. 38 から始まり、一六一三年五月二二日(no. 212)までほぼコンスタントに転写が続いたあと突然間があいて一六一三年一二月二〇日、no. 213で終わっている。なお、(3)は一六二六年六月二日に、また新たに一から番号が付されて転写が始

まっている。ここからまずわかることは、(2)、(1)は、ほぼ連続して転写されているということである。ただし転写を始めた最初すなわち(2)のほうは、すべての頁にわたって枠を示す線が引かれ、頁の上部には章のタイトルを示すごとくに、*Letters to Sir William Plompton who died 20 of Edward the Fourth*と書かれており、手間がかかっている。それに比べて(1)は、枠や章のタイトルが省略され、その代わりに頁の上部には平行四辺形で囲まれたアラビア数字で頁数が書き込まれているという違いがある。当初は、(2)、(1)の順で綴じられていたとすれば、少なくとも(2)と(1)の手紙の番号は通し番号である可能性が高いと思われる。その後、(1)、(2)、(3)の順で綴じ直されてから、全体の通し頁として、アラビア数字の頁数が書き込まれたために、手紙の番号が一部重複してしまうこととなったのだと考えられる。(そこで以下では、LBの手紙の典拠を示す際、この転写者が付した手紙の番号と、全体の通し頁数で示すことにする。それぞれの巻本の編集者が別々に付した番号は紛らわしいので本稿では特に示さない。例えば、LB, no. 51 (p. 31) [1482?/214]は、順に、手紙の番号、(通し頁数)、「記載されている日付、ただし現代の年号表記に改めた。不確かな場合は刊本の編集者の推定に依った。」を表す。ただし刊本の方が参照するのに便利であろうから、特に必要と思われるものには、刊本とその頁を示した)。

さて、テイラーもカービーも、(あとからつけられたと思われる) 通し頁が二七頁から始まっていることと、(最初綴じた順番で通し番号として振ってあり、もともとの順番から言えば第二部にあたる) 手紙の番号が三八から始まっていることを単純に結びつけて、レター・ブックからは、サー・ロバートの手紙が三七通失われてしまったと考えている。そしてレター・ブックがおおむね手紙の書き手の社会的身分の序列にそって編まれていることから、失われた一―二六頁には、おそらくサー・ロバート・プランプトン宛の、国王や大貴族からの手紙が編まれていたのだろうと想像している。しかしここで述べたように、(2)と(1)の手紙の番号が通し番号であるとすれば、失われた手紙は、八通にすぎないことになる。現在、失われていた手紙のうち八通が他の史料から明らかになっているが、それらはサー・ロバートが書いたもの(妻に宛てたもの二通、ヘンリ八世宛て二通)が半分、あとの半分の四通はすべて王侯貴族からの手紙である。(Kirby, *The Plumpton Letters*, p.19 n.104). これらを考え合わせるならば、いまや失われている手紙はほとんどないと思われる。そもそも、サー・ロバートが、国王や王族からさらに三七通も手紙をもらっており、しかもそれぞれが例外的に長い手紙であったとはちょっと信じがたい。それに(2)と(1)の間における、転写の空白期間(日付の隔たり)の短さもこの想像を裏付ける。二一日間八通ならば、(2)のペースとはほぼ同じに

なるが、もし三七通だとすると、それまでの四―五倍の早さでこの期間だけは転写がなされたということになり不自然である。失われた手紙が多くても数頁分だけだとすれば、綴じ直された際(1)の前に綴じられていた二六頁のうち大部分は、何か別のマニスクリプトであった可能性が高いのではないか。それを確認するすべは既に失われてしまっているけれども。後述するように十七世紀初頭のレター・ブックは、当時、コモンプレイス・ブックと同じ目的で作られ、備忘録あるいはメモとして、雑多な集成であるという特徴を持っていたとされる。この史料が十七世紀初頭のレター・ブックの典型的特徴を備えていたとすれば、手紙以外の何らかのフォーミュラリか、あるいはコモンプレイス・ブックに集録されるたぐいのマニスクリプトが最初に綴じられていたことが十分あり得る。

二、カーチュラリ(以下、CBと表記)

羊皮紙の巻本で、約一〇〇〇件にのぼる、家系の重要な証書類・手紙・裁判関係文書などが、十二世紀のものから一五五五年のものまで、個々の国王の統治別に大まかに言って年代順に転写されている。リチャード三世による仲裁裁定草案の写しや、役職に関わる手紙なども転写されており、このなかにサー・ロバート自身が書いたLBにない手紙も含まれる。なお、未修復のため、判読しにくいところは、同時代の写しであるBL, Additional MS 32113 (transcript of the Coucher Book, Townely Sale lot 190) を参

考に用いた。

これら二つの史料は、ほぼ同時進行で転写され、内容的には重複も見られる。従ってそれぞれ別々の目的に合わせて作り出されたと考えられる。後者〔B〕の目的が、家系の来歴や重要文書を参照しやすいように編年でまとめること（家系のカーチュラリを作ること）でありその内容こそ重要であつたとすれば、前者〔A〕は、家系専用の手紙の書き方マニュアル（フォーミュラリ）を作ることがその目的でありむしろ内容よりも形式こそ重要だつたと考えられる。編年でなく、あえて当主別に、そのなかでは差出人の身分・階層序列順に編まれていることから、それは明らかである。さらに言えば、これら二つの史料が作られた十七世紀初頭は、英語の手紙の書き方マニュアルが、大規模に公刊され流行した時代でもあつた。（A・マクファールン、北本正章訳『再生産の歴史人類学』勁草書房一九九九年、二三五頁）。この時代に家系用にあるいは個人用に作られたレター・ブックも現存する。（A. B. Braummüller ed. *A Seventeenth-Century Letter-Book: A Facsimile Edition of Folger MS. V. a. 321* (London and Toronto, 1983).）とりわけ、フォーミュラリとしてのレター・ブックやそれと同じ性格を持っていたこの時代のコモンプレイス・ブックに関しては、*ibid.*, pp. 9-10 を参照）。もしLBが、実際にプランプトン家が受け取った手紙の実例にもとづく、手紙の書

き方マニュアルを意図したものであるとすれば、少なくとも手紙のあいさつ部分はとりわけ厳密に省略されることなく転写されたはずだと考える。事実〔B〕には、手紙の宛名から末尾の句に至るまで、すべての手紙で、記載の省略はまったく見られない。このように考えるならば、プランプトン家の手紙史料は、今回の分析の対象として十分信頼に値すると思われる。

留保すべき点も挙げないと片手落ちになるだろう。十七世紀初頭の、英語の手紙マニュアル・ブームのなかでこの史料は作られたので、ラテン語やフランス語で書かれた手紙は全く〔B〕に収録されずにほとんど失われてしまった。このように、〔B〕を編んだ人間による取捨選択が働いている史料だという限界を忘れてはならない。さらにプランプトン側が差し出した手紙は、家族が受け取ったものを除いてはほとんどなく、その草稿も集録されていない。また、〔B〕のなかで、最も大きなまとまりである、サー・ロバート・プランプトンの手紙を分析に用いるが、〔B〕の最初が失われてしまっているため、サー・ロバートが受け取った手紙のうち、おそらく王侯貴族によるものの一部が欠けてしまっている。とはいえ一人の人間が受け取った手紙のコレクションとしては、ジョン・パストン (John Paston 一四六六年没) の手紙 (約二五〇通) に次いで、サー・ロバート・プランプトンの手紙が多く、しかもパストンやスタナーと比較しても差出人のヴァラエティという点ではサ

ー・ロバートの手紙が最も変化に富んでいる。サー・ロバート・プランプトンへの手紙は、この LB に十六三通、CB など他の史料に八通、あわせて一七一通現存するので、それらを分析に用いることとする。

- (24) Joan W. Kirby, 'A Fifteenth-Century Family, the Plumptions of Plumpton, and their Lawyers, 1461-1515', *Northern History*, XXV(1989), pp.106-119; Joan W. Kirby, 'A Northern Knightly Family in the Waning Middle Ages', *Northern History*, XXXI(1995), pp.86-107; Joan W. Kirby, 'Women in the Plumpton Correspondence: Fiction and Reality', in Ian Wood and G. A. Loud eds., *Church and Chronicle in the Middle Ages*(1991), pp.219-232. K. R. Dockray, 'The Troubles of the Yorkshire Plumptions', *History Today*, XXVII(1977), pp.459-66. また、S. M. Walker, 'The Plumpton Correspondence: A Historical and Social Survey', unpublished MA thesis, University of Leeds, 1962 があるが未見。

- (25) 前掲、一一四頁。

- (26) くハロヤ申から一一通(Bodleian Library, MS Dodsworth 148, fols 109r-v 但し、カーペン版を用いた。Kirby, *The Plumpton Letters*, p.106; WYASL, LC01731/6) シェロヤスクリ伯ハマー・ホールホット (George Talbot, 4th earl of Shrewsbury) (一四六八—一五二八年) から一通 (Bodl. Lib., MS Dodsworth 148, fols 114r-15r 但し用いた

のは、Kirby, *The Plumpton Letters*, p.106) 四代および五代ノースハムバート伯 (earls of Northumberland) から計一〇通 (LB, nos 38(p.27), 39(p.27), 40(p.27), 41(p.28), 42(p.28), 43(p.28), 44(p.29), 45(p.29), 46(p.29), 47(p.30), 48(p.30), 49(p.30), 50(p.31), 51(p.31), 52(p.31), 53(p.32), 54(p.33), 56(p.34), 57(p.34), 58(p.34)) 聖ヨハネ騎士修道会イギリス管区長 Grand prior of England of the Order of St John of Rhodes から一通 (LB, no.143(p.87)) サー・ロバートから妻宛一通 (Bodl. Lib., MS Dodsworth 148, fols 62v-63r 但し用いたのは Kirby, *The Plumpton Letters*, p.169) 合計一五通。

- (27) 最近再発見された、貴族女性の手紙五通を刊行した研究を見ると、その女性の手紙もまた、奉仕する小ジェントリには、'well beloved' を用いており、その方法に関するカーペンタの言う厳密な区別が守られていたことがわかる。Paddy Payne and Caroline Barron, 'The Letters and Life of Elizabeth Despenser, Lady Zouche (d. 1408)', *Nottingham Medieval Studies*, XLI(1997), pp.126-156, esp. pp.136, 148-51.

- (28) 聖ヨハネ騎士修道会イギリス管区長からの手紙は、前掲註(27)のもの (LB, no.143(p.87)) であり、'worshipful' と 'beloved' をあいさの部分で同時に用いている。内容は、自分の甥に対して好意ある扱いをサー・ロバートが為したことへの感謝状である。サリ伯トマス・ハワードの手紙に

については後述、一二二―一二三頁参照。

- (29) Hall, *A Formula Book*, part I (1908, rep. New York 1969) 参照。‘salutem’はアングロ・サクソン期まで起源を遡ることができるといふ。

- (30) サー・ロバート宛てが九通。すなわちヘンリ七世から一通 (Kirby, *The Plumpton Letters*, p.106) 四代および五代ノーサンバランド伯から八通 (LB, nos 40(p.27), 42(p.28), 45(p.29), 47(p.30), 48(p.30), 50(p.31), 53(p.32), 56(p.34))。また父ウィリアム宛は一通 (LB, no.1(p.151))。
- (31) 一例を挙げよう。四代ノーサンバランド伯から準騎士であったロバートに宛てた手紙、一四八〇(?)年一二月三十一日。(LB, no.45(p.29))。

To my welbeloued Robart Plompton

Right welbeloued I gret yow well, willing & charging yow to be with me in all hast possible after the sight of this my writing, not failing herof, as ye will answer to the Kings Highnes and to me at your perill. Written at Lekinfeld, the last day of December.

Henry Northumberland.

(this lettre hath a seale at. Copied the 25 day of Feb. 1612)

(カッコ内は、転写者の覚え書き部分である)
(意訳) 親愛なるロバート・プランプトンへ

まさしく親愛なる者へ、ノーサンバランド伯よりうきげ

んようとあいさつをおくる。この手紙を受け取り次第直ちに、私のもとにはせ参ぜよ。自身の危険を省みず国王陛下と私の恩に報いたいと望むのならば、遅滞無きよう心するように。

レコンフィールド (Leconfield) にて。一二月三十一日。
ヘンリ・ノーサンバランド

- (32) 一四八〇年九月七日。LB, no.53(p. 32). ‘cousin’という表現には理由があった。ロバートは、妻Agnes Gascoigne (一四七七年結婚) を通じて、パーシイ家とは姻戚関係にあった。妻アグネスの兄 William Gascoigne (一四八七年没) は、第三代ノーサンバランド伯ヘンリ・パーシイの娘マーガレットと結婚している。つまりロバートの妻アグネスは、第四代ノーサンバランド伯と義理の兄弟にあたる。家系図参照。

- (33) Stapleton, *The Plumpton Correspondence*, p.96. この手紙は、現在行方不明のため、一九世紀にトマス・ステイプルトンが転写したものに依った。サリ伯は、数多くの子供に恵まれ、その結婚を通じてイングランドの多くの主要な家系と縁続きになっていた。(Dictionary of National Biography, Thomas Howard I の項参照)。プランプトン家との直接の関係は不明だが、おそらく代を遡ってゆけば何らかの結び付きがあったとしても不思議ではないし、サリ伯自身も案外その程度の認識だったのではないか。興味深いことにサリ伯は、この手紙とほぼ同時期にジョン・パストン(一

五〇四年没)に宛てた三通の手紙においても、‘cousin’
という呼びかけを用いてパストンに‘recommend’している。
それらの手紙の内容は、知人に力添えするよう要請
(Davis, *Paston Letters*, vol.2 (1976), no.842, p.480-1)‘借金
取り立ての依頼’(*Ibid.*, no.843, pp.481-2)‘応募兵を送って
くれたことに対する感状’(*Ibid.*, no.844, p.482)であった。
(34) Kirby, *The Plumpton Letters*, pp.13, 107-8. 自分のアフ
ィニティの成員であった人物の未亡人が寡婦産として保有
する地所を、サー・ロバートが権利主張して占有しようと
した試みに待ったをかけ、従うなら未亡人に訴訟を起こさ
せはしないと述べて、なかば脅し気味に「友人」としてロ
バートに忠告している。

(35) R. Somerville, *History of the Duchy of Lancaster* vol.1
(1953), pp.524-5. および Kirby, *The Plumpton Letters*,
pp.324-5. サー・ロバートは、第四代伯から、伯領スポフ
ォス執事職 (the steward of the lordship of Spofforth) に
任じられ、二〇ポンドの年給金を受け取っている。 Kirby,
Northern History, XXV (1989), p.111.

(36) LB, nos 45 (p.29) [1480/12/31], 50 (p.31) [1481/10/9],
53 (p.32) [1480/9/7] とともに召集令状, 41 (p.28) [1487/6/26]
ネアズバラ城代関係の指令, 56 (p.34) [1486-7/11/19] 騎乗
同行の準備の労をねぎらう感状。以上五通。

(37) 残りの四通は、LB, nos 46 (pp.29-30) [1487/6/23] ネア
ズバラ城代として容疑者の収監命令, 48 (p.30) [1486-

8/4/6], 40 (p.27) [1489/4/24] とともに召集令状, 54 (p.33)
[1488/7/31] 不穏な者を収監する命令。なおあいさつ部
分の欠けている手紙は、LB, no.42 (p.28) [1487?] であり内
容は召喚状。

(38) LB, nos 47 (p.30) [1498/9?] (召喚状、末尾に ‘yure
cousin’ とある), 49 (pp.30-1) [1499/3/27], 44 (p.29)
[1499/4/2] (ともに、伯のスポフォス領狩猟園に関する依
頼), 58 (pp.34-5) [1499/6/15] (伯の配下同士の争いを調停
することを依頼), 43 (p.28) [1499/10/30] (伯のスポフォス
領狩猟園から猟犬を送ってくれるよう依頼), 52 (pp.31-2)
[1499-1503/1/31] (伯が推挙したスポフォス教区教会代理
司祭が保有する土地に対するサー・ロバートの権利要求を
取り下げるよう依頼)。

(39) エドワード・プランプトンは、サー・ロバートの父で
あるサー・ウィリアム・プランプトンの弟ゴドフリの子供
であり、しかもサー・ロバートの母ジョーンとエドワー
ド・プランプトンの母アリスは姉妹であった(家系図、お
よび前掲拙稿「十五世紀のプランプトン家と結婚」三六一
頁参照)。エドワードはおそらくプランプトン家本家の費
用で、ロンドンの法学予備院の一二 (Furnivall's Inn) に
送られ法的知識を身につけたのち、サー・ロバートに法実
務家として奉仕した。 Kirby, *The Plumpton Letters*, pp.330-
1. エドワードの手紙は、一四八三年から一四九八年にわた
って、一人の差出人としては最も多く二三通あるので、

検討するだけの価値はあると思われる。

- (40) 他に LB, nos 192(pp.128-9) [1483/6/30], 191(p.127) [1483/10/18], 207(pp.144-5) [1486/4/3], 205(pp.142-3) [1489/1/11], 202(pp.139-40) [1489/12/17] の五通。うち最初の no.192 のみ、書式がやや簡単になっている。
- (41) 他に LB, nos 195(pp.132-3) [1490/2/10], 196(pp.133-4) [1490/2/20], 200(pp.137-8) [1490/5/6], 204(pp.141-2) [1490/6/11], 187(p.123) [1490/6/28], 189(p.124) [1490/11/4], 193(pp.129-30) [1490/11/27], 199(pp.136-7) [1495/10/26], 188(pp.123-4) [1496/1/14], 185(pp.121-2) [1496/2/13], 203(pp.140-1) [1497/2/3], 194(pp.130-2) [1497/3/2], 201(p.139) [1497/3/10], 190(pp.125-7) [1497/3/19], 198(pp.135-6) [1498?/2/16] の一五通。
- (42) ‘… yt pleaseth yow when my lord [Richard Fox, Bishop of Durham and Lord Privy Seal] cometh into *your* country[Yorkshire], to se[e] him & ride a myle or ij with him & wellcome him to [the] country, yt will doe good many wayes’ (no.185, p.122)
- (43) コリハ・リッチモントによれば、エドワード・プラムプトンの書いた一四八〇年代の手紙には、文末に ‘with the grace of Jhesu’ (キリストの加護を) と述べる特徴が見られるが、これは当時のシェントリにおける宗教心性の变化を示すものであると云う。Colin Richmond, ‘Religion and the Fifteenth-Century English Gentleman’ in R. B.

Dobson ed., *The Church, Politics and Patronage in the Fifteenth Century* (Gloucester 1984), pp.193-208, esp.p.200.

この事実が何か関係しているのかも知れない。

- (44) Kirby, *The Plumpton Letters*, pp.332-3. LB, nos 98(pp.57-8) [c.1499], 99(pp.58-9) [1502/11/8], 94(pp.53-4) [1503], 95(pp.54-5) [1503], 100(pp.59-60) [1504/11/10], 101(pp.60-1) [1504], 96(pp.55-6) [1515/6/4], 97(p.57) [1515/10/3] の八通。サー・ロバートはシャーマンの結婚権を保有していた。そこで一五〇四年以前から、サー・ロバートの娘とシャーマンは、ダービィシャーで後見人である祖母(エリザベス)のもとで結婚を前提に一緒に暮らしていた。一五〇四年は、彼とサー・ロバートの娘アンとの床入りがなされた(結婚の完成)年である。すべての手紙のなかで彼はサー・ロバートに父あるいは義父(father in law)と呼びかけているが、意識して区別して用いていたわけではなかったらしい。
- (45) LB, no.98. mekely (現代英語表記では meekly); here (hear); Jhesu(Jesus); Ioy(joy).
- (46) ‘Sir, the cause of my wryting is but to heare of *your* gud welfare... ..it[this letter] is wrytten hastyly *with* my own hand & without the vise[device or advice] of any other body...’ (*Ibid.*)
- (47) LB, nos 88(pp.48-9) [1502/11/16], 87(p.48) [1502/11/27], 83(p.46) [1502/12/21], 84(p.47)

[1504/3/19], 89(p.49-50) [1504/4/12], 82(p.46) [1504/4/26] (以上、夫宛)。86(p.47-8) [1503/1/15], 85 (p.47) [1504/4/13]. アグネス・ギヤスコインとサー・ロバートとの結婚に関しては、前掲拙稿「十五世紀のプランプトン家と結婚」、二六二―二頁参照。

(48) LB, no.84, good sped in your matters 諸事恙無く(具体的には、訴訟がうまく行くように) という意味。(比較のためにデイヴィスの七区分における対応番号を付け加えた)。

(49) Kirby, *The Plumpton Letters*, p.317.

(50) LB, no.70(p.40) [after 1521]. 同様なものは、他に LB, nos 71(p.41) [日付不明], 72(p.41) [1502/3/19] (但し、後ろに as hartely as I can が付されている), 74(p.42) [1515?/12/18]。残りの一通、LB, no.73(p.42) [日付不明] は 'Right worshipfull vncler' となっている。

(51) 本文中 (一二三頁) で言及しなかった五人目は、エドワード・プランプトンの跡を継いで、サー・ロバートの法律顧問・実務家となったジョン・プラン (John Pullen) (一五四一年没) である。ロンドンの法学院の一つ、リンカン・イン出身、一四九九年から一五〇二年にかけて五通の手紙をロンドンからサー・ロバート宛てに送っている。内容はサー・ロバートに対する訴訟の動向が中心。ただし、書式は一定してゐない。LB, nos 151 (p.93) [1499/1/29], 155 (p.97) [1499/11/21], 152(pp.95) [1501/5/18], 154

(p.97) [1501/5/31], 153 (p.95-6) [1502/11/6]。そのうち nos 155, 152, 154 は 'Right worshipfull Sir, I recommend me vnto your mastership' で始まるが、他はばらばらである。けれどもサー・ウィリアム・ギヤスコインと同様、ジョン・プランの手紙もあいさつ部分が短く、非常に実務的である点は共通している。

(52) パドレイのエア家 (the Eyre of Padley) は、ダービィシャに所領を持つ騎士家系であった。しかし一四三〇―一五〇九年の間、当主は騎士に叙されていない。彼と同名の父 (あるいは長兄) ロバート (一四九八年没) は、一四八〇年にダービィシャのシェリフとなり、治安判事や他の州役職を歴任した。Kirby, *The Plumpton Letters*, pp.312-3.

(53) LB, nos 105(p.63) [1501/5/20] (ロバート・エアは、シュロウズベリ伯ジョージ・ツールボットのダービィシャ所領の執事も務めていた。Kirby, *The Plumpton Letters*, p.147 note), 106(p.63) [1501/9]。

(54) LB, nos 107(p.64) [1499/10/15], 102(p.61) [1499-1500]。

(55) 準騎士ロバート・エア (一五〇二年没) の父 (あるいは長兄) ロバートは、サー・ロバート・プランプトンに二通手紙を書いている。おそらく一四八九年に書かれた手紙は、'Right worshipfull Sir, I recommend me vnto your mastership...' という表現で始まり、サー・ロバート・プランプトンが交わした契約書に言及して、親戚にお金を払

つてくれるよう依頼している。というのも、「それ（契約書）を見たならばよもや否定なさらないでしょう。なぜなら（契約書に付してある）あなた様の印章は、広く知れ渡っているのですから・・・（LB, no.104(p.62) [1489/3/23]」。

次の手紙は、よりシンプルなあいさつ表現 'After all due recommendations had' で始まり、内容は先の件に関する仲裁裁定を伝えるものとなっている（LB, no.103 (p.61) [1489/8/4]）。このように、父（長兄）の手紙に関しても、手紙の内容に応じた、あいさつ部分の変化が見受けられる。

(56) Kirby, *The Plumpton Letters*, p.84 note.

(57) この当時の、土地の貸し借りは、単なる金銭的ビジネス関係に止まらなかったことに留意する必要がある。土地の貸し借りを通じて、安定した結び付きを創設するという意味もあったからである。土地を貸す側が、自分はサーヴィスを提供する側であるといわんばかりに、自分のことを 'servant' と述べ、借りる側を 'mastership' と呼んでいる点は興味深い。もちろん貸した側は、地代をきちんと取り立てられるように、相手を持ち上げているにすぎないかもしれないけれども、これらの表現には、相手との新たなサーヴィスの関係に入ったことを明確化する意味もあったのではなからうか。

(58) after my dowte of come[n]dations remembering
*OED*に依れば、このような commendation は、やや遠い関係の間柄であるときに用いられるあいさつであるとい

う。

(59) Kirby, *The Plumpton Letters*, p.175 note でも同じ指摘がされている。

(60) アグネスは、夫サー・ロバート・プランプトンに、'By your wife' あるいは 'By me' という表現を多く用いている（例えば、LB, nos 82, 83, 84, 87, 88）。彼女は、ギヤスコイン家出身だけに、実家の格を意識していたのかもしれない。しかしながら例えば、前掲註（44）のジャーマン・ド・ラ・ポウルの祖母で後見人でもあった、エリザベス・ド・ラ・ポウルは、サー・ロバート宛の手紙のなかで、たいへん丁寧なあいさつ表現と同時に、末尾で 'Yowre true & faythfull beadwoman to hir power' と記している（LB, no.109 (pp.65-6) [1501/11/26]）。彼女は、孫ジャーマンの成長に心を砕き、その財産に目を光らせ、孫の成長の後は、孫夫妻と隠居契約をしてさっさと尼僧院に入ってしまった気骨ある面白い人物である。

ちなみに男性に関しては、法実務家としてサー・ロバートに奉仕した前掲註（51）のジョン・プランは、彼の手紙のほとんどを 'Your servant and beadsman' で結んでいるし、サー・ロバートの親族で聖職者であるリチャード・プランプトンも同様である（LB, no.145, (pp.87-9) [1501/6/27]）。

(61) Kirby, *The Plumpton Letters*, p.175 note; J.Raine and J. T. Clay eds., *Testamenta Eboracensia* (Surtees Society

LIII, 1869), pp.223-4. トマス・ロスの親族には聖職者が多い。彼の遺言書のなかで、モウドは寡婦産として、年六マルクを与えられている。

(32) Kirby, *The Plumpton Letters*, p.66 note (下段)2.

(33) Rosemary Horrox, *Richard III, A Study of Service* (Cambridge 1989), esp. introduction; Rosemary Horrox ed., *Fifteenth-Century Attitudes: Perceptions of Society in Late Medieval England* (Cambridge 1994), esp. chap. 4: Services; Anne Curry and Elizabeth Matthew eds., *Concepts and Patterns of Service in the Later Middle Ages* (Woodbridge, Suffolk 2000).

(64) LB, no.163(p.106)[1499/9/14]. 準騎士ロバート・リーベンソープ(Robert Leventhorpe)の手紙。疫病除けにとてもよく効くまじないとして、聖オズワルドの祝日前夜、斎日として断食精進し、それをこれからも毎年続けることを誓うことを、サー・ロバート・プランプトンに勧めている。折悪しくこの頃プランプトンでは疫病が流行していた(前述一二五頁参照)。

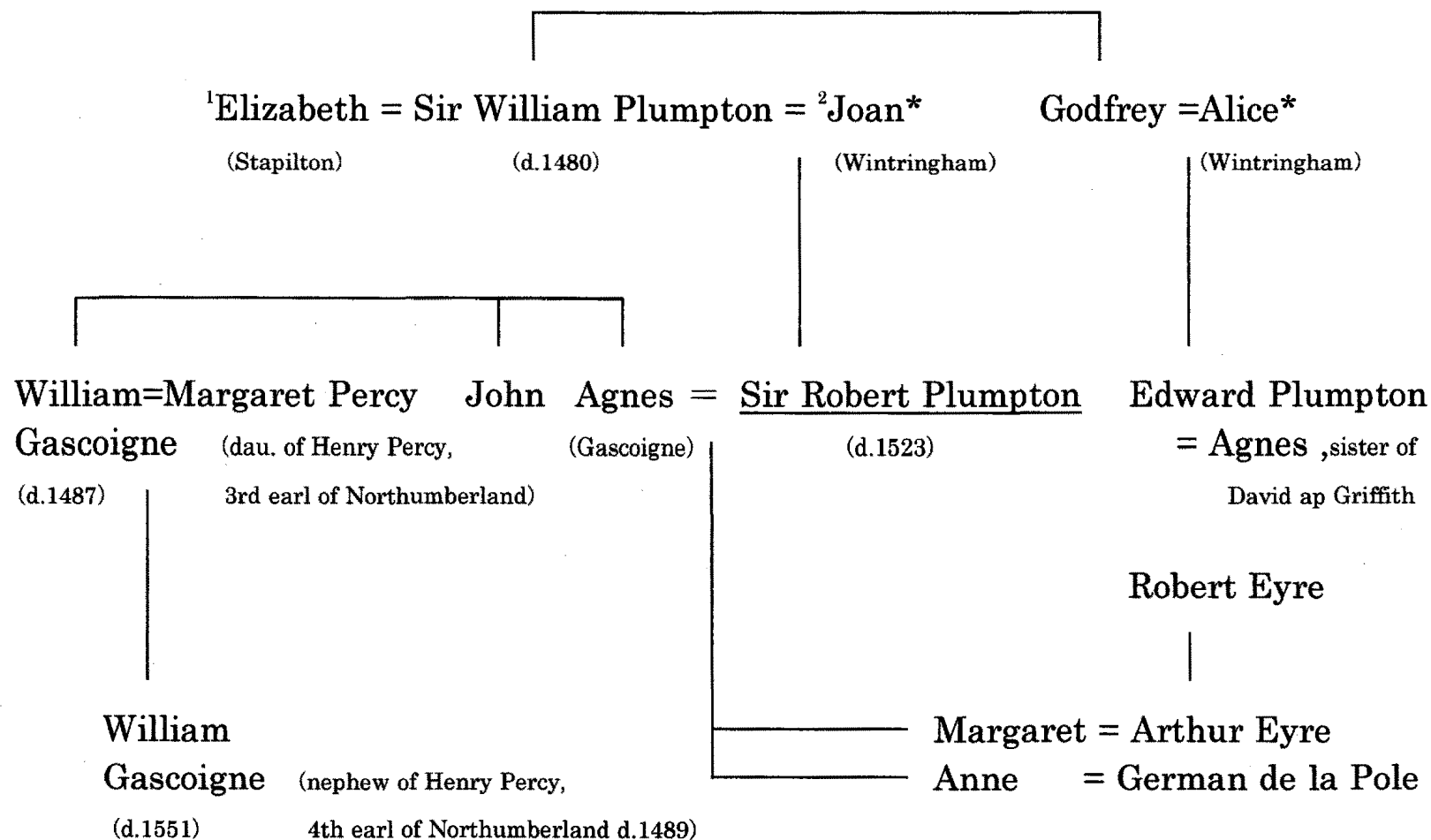
(65) 一五〇〇年に、サー・ロバート・プランプトンの友人で有能な法律実務家でもあった、ジョージ・エマソン(George Emerson)は、サー・ロバートに宛てた手紙の書き出し部分でこう述べている。「あなた様にこのようなご奉仕(service)でもって報いられるまで生きのびることが出来るよう、全能の神様をお願いいたします…」(LB, no.162

(pp.104-5) [1500/11/10]).そして続けて財務府と尚書部の役人に、サー・ロバートからの月々の手当を手渡したことを述べ、サー・ロバートの父に関する審問にあたるシェリフの名前を伝えている。

(66) 社会の流動性が高くなっていた十五世紀のイギリスにおいては、身分・階層社会とはいっても、相手との社会的地位の差が、はっきりしない、曖昧な場合が多くなってきたと考えられる。サル山のサルが、群のなかでの序列を決める際に、お互いの力関係をはかるためにさぐり合いやけんが必要とされるように、相手との差や近しさをはかり調節するものとして、「手紙の長いあいさつ部分」という「儀礼」が必要だったとも考えられる。

さらにいえば、十五世紀の手紙が持っていたさまざまな機能をきちんと跡づけることが必要である。「例の件、よろしく」というようなあいまいな内容の手紙が持った意味は、まさに今述べた service を媒介として、両者間の社会的関係を再確認する儀式的意味が強かったであろう。また、「詳しくはこの手紙の使者が話しますから聞いてください」という手紙は、手紙を運ぶ使者への、信任状としての意味が強かったと思われる。また感状など、その場で読み上げられることにも意味があった手紙があった。このように文面の内容だけにとどまらない検討が今後必要であろう。

プランプトン家系図（一部抜粋）



(女性の旧姓を示した)

* Joan Wintringham と Alice Wintringham は姉妹